42231
教科書文庫
4
810
42-1927
200000
64443

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

新文國文

巻三

375.9
Shi·13
資料室

資料室

昭和二年三月四日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

新女子國文

卷三

亀田

広島大学
教
64443
図書

文學博士 下田次郎
文學博士 尾上八郎 編

375.9
Shi 13

昭憲皇太后御歌

朝ごとにむかふかがみのくもりなく
あらまほしきはこころなりけり

目次

一 旅の感想……西條八十……四
二 春日野……大類伸……九
三 法隆寺の鐘……高濱虛子……一三
四 保津川下り……夏目漱石……一八
五 高瀨舟……森鷗外……二七
六 人と境遇……相馬御風……四三
七 詩二篇（詩）…………五三
八 山莊雜記……荻原井泉水……五六
九 近江の國……谷崎潤一郎……七〇
一〇 田舍の樂しみ……五十嵐力……八四
一一 大樹……薄田泣菫……八一
一二 夢みる巢……吉田絃二郎……八七
一三 小鳥（詩）……宮崎丈二……九〇
一四 食卓の上……北原白秋……九二
一五 蟲二題……生方敏郎……九五
一六 少年……野上彌生子……一〇二
一七 森の繪……吉村冬彥……一一
一八 繪畫の感化……那珂通高……一八
一九 富籤……矢田挿雲……二六
二〇 形……菊池寬……一三一
二一 春……藤森成吉……一三八
二二 紅椿（詩）……三木露風……一五二
二三 碧色の花……德富健次郎……一五四
二四 わが國の家庭……芳賀矢一……一六一
二五 北京雜觀……鶴見祐輔……一六八
二六 機械と文明……河上肇……一七三
二七 讀書……坪內逍遙……一八〇

一　旅の感想

歐洲の旅をしてゐて、時時ふと妙な氣持に打たれるのは、自分が今歩いてゐる町に、少しも過去の記憶の伴なつてゐないことであつた。これが、日本ならば、如何に自分に緣の遠い町でも、多少それに關した記憶がある。よし自身に直接の記憶はなくとも、歷史の上から、或は地理の上から、その土地に就て學んだ豫備知識、卽ち記憶ともいふべきものがあるものである。

ところが、歐洲の或小さい町、昨日までその存在さへ知らなかつた町などへ急に入ると、私には、まるで何から何

まで初對面であつた。そこの古びた城壁でも、碧く淀んだ運河でも、街路樹でも、行きちがふ男女の群でも。

かかる全然初印象の町は、私にとつては、自分の心の中に在る空想の町と少しも變らなかつた。空想の町に記憶がないやうに、これらの町にも記憶がなかつたであるから、かうした町に四五日ぶらぶらしてゐると、私は一體自分が現實に居るのか、夢を見てゐるのか、時時わからなくなつた。何を小半日空想してゐようと、誰も肩に手をかけて醒ましてくれる人もないのである。

かうした土地に永く滯在してゐると、氣が狂ふかも知れぬと、或日私は考へて、薄氣味わるく、そこそこにその町

を後にして立ちのいたこともあるが、あの夢と現實とが錯綜した不思議な氣分は、今だに忘れられない。

二年の旅の中で、私が最も樂しかつた日として記憶してゐるのは、地中海岸の避寒地キャンヌ(一)に逗留してゐた頃のことである。私は、或晴れた暖かい日の午後、キャンヌからグラス(二)へ行かうとして出かけた。グラスは四五里離れた山中の、花の多い、香水の産地として、その地方で有名な小さな町である。

私が一人ぼつぼつ歩いて峠へかかると、その峠の中腹に、獅子の首か何かが彫つてある古い石の間から迸り出る泉があつた。そこから綺麗な清水が細く流れ落ちてゐた。その邊には、青いこまかな草が生え、見知らぬほの赤い花などが咲いてゐた。

どういふ氣持から私はその泉の水をいたづらし始めたのか知らぬ。けれど、その傍に坐つて、流れ出づる冷たい水に觸つてゐると、何ともいへず、靜かな和らいだ心持になつてきた。

峠の中腹だから、赤い屋根瓦が日に輝いてゐるキャンヌの町から、紺碧の海面まで一目に見おろされて、遠くでお寺の鐘が鳴つてゐた。峠の路を、牛を牽いた子供や、黑い喪服を着た老婆などが通つた。彼等は若い東洋人の姿を物珍しげに振りかへり振りかへり眺めて行つた。

(一) Cannes. フランスの南東隅、地中海岸にある町。
(二) Grasse. キャンヌの西北數里の處にある町。

もう立つて歩き出さうと幾度も考へながら、私は何となく立上るのが惜しまれて、ちやうど煎豆に手を出した人が急に齧り止めぬやうに、その泉の水を掌の凹みに溜めては明け、溜めては明け、さまざまな想に耽りながら、凡そ三時間近くも其處に一人で遊んでゐた。

やがて、やつと立上つた頃は、もう午後の日が山の端へ傾きかけて、薄ら寒くなつてゐたので、グラス行きは中止して、私はもとの路をキャンヌの方へと戻つた。

獨歩の「武藏野」の中に、一人の童が丘の上に寢ころんで、大空に白雲の浮んでゐるのを眺めてゐたことが書いてある。そして、その童が成長してから後も、常にその靜かな

(一) 國木田氏。明治時代の小説家。
(二) その小品文集。

一日を忘れることがなかつたと書いてある。

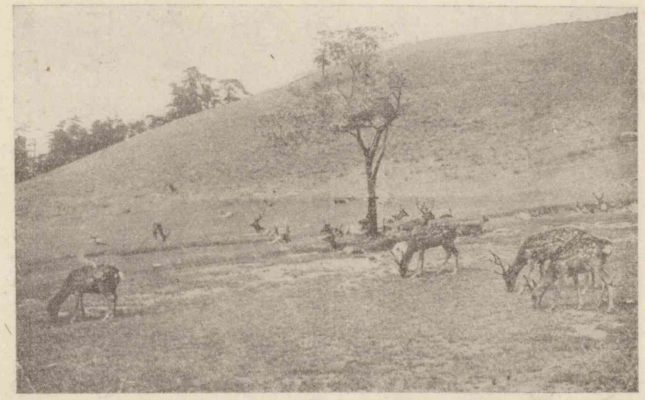
同じやうに、私もあのキャンヌの峠で、小半日も泉の水に子供のやうに遊び戯れてゐたことを忘れることはあるまい。その日、水をいぢりながら、私の胸に且つ涌き且つ消えたあのさまざまな想を、私は生涯に亙つて愛しむであらう。（西條八十の文による）

二　春日野

奈良の附近は到る處古跡に富んでゐます。古い寺の屋根が森の間に見えてゐたり、五重の塔が岡の向ふに霞んでゐたり、畑の中に殘つた礎石の割目に寂しく菫などが

(一)奈良市東大寺の東方にあり、海拔約三四二米。

(二)春日野にあり、武甕槌神、經津主命、天兒屋根命、比賣神の四座を祀る。



若草山

咲いてゐたりします。かうして目に入る物、いづれも、遠い昔を憶ひ出す種とならないものはありません。

わけても、あの優しい若草山(一)の麓、そこは春日野と呼ばれてゐますが、その野ほど色色の語りぐさに富んだ處はありますまい。愛らしい多くの鹿は、春日神社(二)の使はしめとして、奈良の人人は今でも大切にしてゐますが、昔は、若しもその鹿に何か危害を加へでもしますと、その人は生きな

(三)興福寺の南門の前にある。周回三八六間。

(四)この傳說は大和物語に見えてゐる。

(五)風雅和歌集卷第一に見える崇德院の御歌である。

がら石埋めにされたといふほどであります。その鹿が群をなして遊んでゐます。猿澤(三)の池もその春日野の一部と見られますが、奈良(四)の御門の御時に、年若い采女がおのが身の上をはかなんで入水したといふので、殊に有名になつてゐます。

猿澤の池から少し東、愛らしい鹿の澤山に遊んでゐる緑の野原の中に、雪消の澤と呼ばれる小さな池があつて、古歌にも、

春來れば雪消のさはに袖垂れてまだうらわかき若菜をぞ摘む(五)

と詠じてあります。昔、あの優美な衣裝を着けたうら若い

少女たちが、おのが身の上にも似たうら若い若菜を摘んだのは、いづれこの池の畔であつたのでせう。今は紫の色ゆかしげな藤の花が、長い房を水面に垂れてゐて、あたりには水色や紅や白の日傘が、爽かな五月の日影の下に輝いてゐます。

けれども、千年も昔の春日野は、必ずしも、少女たちの戯れ遊ぶ姿だけで彩られてゐたのではありません。その頃、春日野を一に飛火野とも呼んでゐたのでありますが、それは戰爭などの如き國家に一大事の起つた場合に、高く烽火を打上げて急を知らせる目的で「とぶ火」といふものを設備した處があつたからです。その烽火の番兵どもは、

嚴めしい姿をして、ここの野路を徘徊してゐたに違ありません。さればこそ、古歌にも、

春日野の飛火の野守いでて見よいま幾日ありて若菜つみてん*

などと詠んでありますす。（大類伸の文による）

*古今和歌集卷第一に見え、題しらず讀人しらずの歌である。

三　法隆寺の鐘

山門をはひると、すぐ右側に、寫眞や、寶物の説明やくさぐさのものが並べてあり、蒲團を掛けた小さな猫火鉢が置いてあつて、人は居らぬ。案内者が「八さあん。」と呼んだが、返事がない。鐘がごおんと鳴る。案内者は默つて猿臂を延

ばして、戸棚の横から長い鍵を出して、私どもの前に立つた。

私どもは、塔を見上げ、山門を見返りつつ、その後についてて行く。案内者は金堂の横の扉に鍵を突込んで、こつこつとこねくるが、どうしても開かない。鐘がごおんと鳴る。案内者は、鍵を突込んだままにしておいて、鐘楼の方に行く。見ると、二階建のやうになつて居る鐘楼の下に、袴とも腰衣ともつかぬやうなものを腰に纏うた一人の男が、長い綱を持つて立つて居る。私どもは案内者のあとについて行く。男が綱をゆるめたと見ると、鐘がごおんと鳴る。

「八さん、開けておくれ。わたしがその間撞いてゐるから。」

と案内者は代つて綱を持つた。寺男は默つて綱を渡して、金堂の方に走つて行つた。案内者は一二三四と、口のうちで撞木の搖れる數を數へて、五つ目に綱をゆるめる。さうすると、撞木が鐘に當る。ごおんと鳴る。嘗て、佛蘭西から日本の美術を調べに來て居た人が、特にこの寺の鐘を賞讃して居た事を憶ひ出す。見上げると、他の寺の鐘樓とは違つて、鐘は露出して居ない。薄暗い處に、細長い形をした、餘り大きくない鐘の青錆が、品よく古色を呈して着いて居るのが、窓から射し入る光線で、朧げながら見える撞木が鐘に當ると、ごおんごおうごおうごおうと、靜かに遠くへ傳はる響にも、上代の音がある。私は堪らなくなつて、

法隆寺壁畫

「どうか、私にも一度撞かしてくれないか。」

と案内者に賴んで、教はるままに、一二三と數を繰りつつ、五つ目に大きく引いて、綱を放した。撞木が當るには當つたが、辛うじて音を發したばかりで、涼しい清い音は出なかつた。

法隆寺

殘念に思つて、今一度と數を繰つて、又綱をゆるめた。前よりはやや好い音を出したが、それでも、心耳を澄ます音ではなかつた。同行の把栗*が、

「私にも一つ撞かしてくれ。」

*俳人の名。

と、綱を持つて撞いた。同様に力の無い響であつた。漸く金堂を開けた寺男が歸つて來て、

「そんな撞きやうをしては困りますな。」

と、綱を取つて、代つて撞いた。鐘の音は再び澄んだ力のある音に返つた。

私どもの撞いた鐘の音を、法隆寺の村人は何と聞いたらう。田を耕しながら、その力のない音に耳をそばだてて、佛力の俄にかくも衰へたかと、定めし驚いたことであつたらう。しかし、それはただ三撞であつた。四撞目は再び元の音に戻つて、天日は舊の如く明かになつた。嗚呼、この靈鐘を瀆した罪は深い。けれども、法隆寺始まつて以來、佛法

の滅びるまで、この寺の鐘は何萬返鳴ることであらう、何億返鳴る事であらう。何萬返、何億返でもよい。そのうちの二返だけは、私が撞いた鐘の音だと思ふと嬉しい。若し、次の世に、この罪深い私が萬萬一にも佛の國に生れるやうな事があるならば、それは、確にこの二撞の音による事と思はれる。

この村は砧も法の響かな　（高濱虛子の文による）

四　保津川下り

浮かれ人を花に送る京の汽車は、嵯峨より二條に引返す。引返さぬは、山を貫いて丹波へ抜ける。予等二人は丹波

*京都府南桑田郡に在る町。京都から六里。山陰本線の一驛。

行の切符を買つて、*亀岡に降りた。保津川下りはこの驛よりする掟である。下るべき水は目の前にまだ緩く流れて、碧油の趣をなす。岸は開いて、里の子の摘む土筆も生えてゐる。舟子は舟を渚に寄せて客を待つ。

「妙な舟だな。」

と友が言ふ。底は一枚板の平かに、舷は尺と水を離れぬ。赤い毛布に煙草盆を置いて、二人は好き程の間隔に座を占める。

「左へ寄つて居やはつたら大丈夫どす。波はかからしまへん。」

と船頭が言ふ。船頭の數は四人である。眞先なるは二間の

竹竿、續く二人は右側に櫂、左に立つ一人は同じく竿である。

ぎいぎいと櫂が鳴る。粗削に平げた樫の頸筋を、太い藤蔓に捲いて、餘る一尺に丸みを持たせたのは、兩の手にむんづと握るたよりである。握る手の節の隆きは、眞黒きは、松の小枝に青筋立てて、うんと搔く力の脈を通はせたやうに見える。藤蔓に頸根を抑へられた櫂が、搔く毎に撓みでもすることか、強きうなじを眞直に立てたまま、藤蔓と摺れ、舷と摺れる。櫂は一搔毎にぎいぎいと鳴る。

重なる水の逼つて行く頭の上には、山城を屏風と圍ふ春の山が聳えて居る。逼つた水は、是非なく山と山との間に入る。帽に照る日の、忽に影を失ふかと思へば、舟は早くも山峽に入る。保津の瀨はこれからである。

「愈、來たぜ。」

と、友は船頭の體を透かして、岩と岩との逼る間を半町の向ふに見る。水はどうと鳴る。

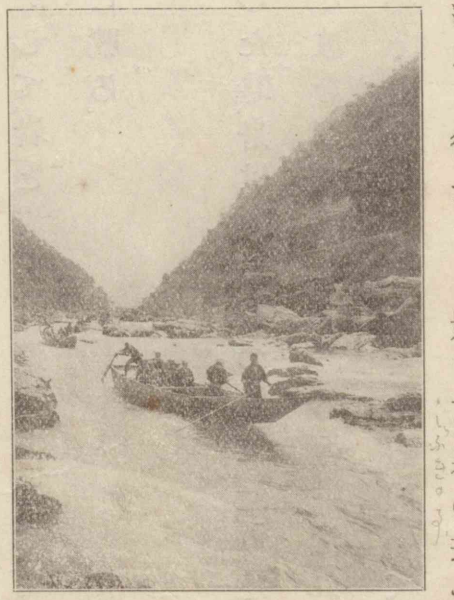
「なるほど。」

と、予が舷から首を出した時、舟ははや瀨の中に辷り込んだ。右側の二人は、すはと波を切る手を緩める。櫂は流れて舷に着く。舳に立つは竿を横たへたままでゐる。傾いて矢の如く下る舟は、どどどと刻み足に、舟底に据ゑた尻に響く。こはれるなと思うた時には、もう走る瀨を脫出してゐた。

「あれだ。」と、友が指す後を見ると、白い泡が一町ばかり、逆落しに嚙合つて、谷を洩れる微かな日影を、萬顆の珠が我勝ちに奪ひ合つてゐる。

「壯なものだ。」

と、友は大いに御意に入つたらしい。併し、船頭は至極冷淡で、ひたすら櫂を動かし來り、竿を操り去る。通る瀨はさまざまに廻る。廻る毎に、新なる山が當面に躍り出す。石山、松山、雜木山と數ふる遑を行客に許さざる疾き流は、舟を驅つて、ま



保津川下り

た奔湍に躍り込む。

大きな丸い岩である。苔を疊む煩はしさを避けて、紫の裸身に打當つて碎け散る飛沫を、春寒く腰から浴びて、緑崩るる瀨の眞中に、舟こそ來れと待つ。舟は矢も楯も物かは、一途にこの大岩を目懸けて突當る。渦まいて去る水の、岩に裂かれたる向ふは見えぬ。岩に突當つて碎けるか、捲込まれて見えぬ彼方にどつと落ちて行くか。舟は只まともに進む。

「當るぜ。」

と、友が腰を浮かせた時、紫の大岩は、早くも船頭の黑い頭を壓して突立つた。船頭は「うん」と舳に氣合を入れた。舟は

碎ける程の勢で、波を呑む岩の太つ腹に潜り込む。横たへた竿を取直して、肩より高く兩の手が擧るとともに、舟はぐうと廻つた。突放す竿の先から岩の裾を尺も餘さず斜に辷つて、舟は向ふへ落出した。

急灘を落ちつくすと、向ふから空舟が上つてくる。竿も使はねば、櫂は無論の事である。岩角に突張つた懸命の拳を敢めて、肩から斜に盲縞を掠めた細引繩に、長長と谷間傳ひを、根限り戻り舟を牽いて來る。水行く外に尺寸の餘地だに見出し難い岸邊を、石に飛び、岩に這うて、草鞋のめり込むまで、腰を前に折る。だらりと下げた兩の手は、堰かれて注ぐ渦の中に指先を浸すばかりである。うんと踏張

る幾世の金剛力に、岩は自然と磨滅つて、引懸けて行く足の裏を、やすやすと受ける段段もある。長い竹を此處彼處と岩の上に渡したのは、牽綱を容易に且つ疾く辷らすための策だといふ。

「少しは穩かになつたね。」

と、予は左右の岸に目を放つ。踏む角も見えぬ切立つた山の遙かの上に、鉈の音が丁丁と響く。黑い影は空高く動く。友も手を翳し、咽喉佛を突きだして峯を見上げ、

「まるで猿だ。」

とは言つたが、

「馴れると何でもするものだよ。」

と別に感心したらしい顔付でもない。

予は心に幾分の餘裕が出來て、

「この流は餘り急過ぎる。少しも餘裕がない。のべつに曲つてゐる。だから、處處にかういふ場處がないといけない。」

と言ふ。卽座に友は、

「僕はもつと走りたい。どうも先刻の岩の腹を突いて曲つた時など、實に愉快だつた。願はくは船頭の竿を借りて、僕が舟を廻したかつた。」

と腕を撫す。

「君が廻せば、今頃はお互に成佛して居る時分だ。」

二人は哄笑する。

(一) 嵐山の西方の山腹にある。惠心僧都の作にかかる千手觀音を本尊としてゐる。
(二) 福島縣白河の城主松平定信。老中となつて、所謂寛政の大改革を行つた政治家。文政十二(一八四九)年歿、年七十二。
(三) 光格天皇の御代の年號。(一七八九—一八四〇)
(四) 京都東山にある淨土宗の本山。

亂れ起る岩石を左右に繞る流は、抱くが如くそと割れて、半ば碧を透明に含む光琳波が、早蕨に似た曲線を描いて、巖角をゆるりと越す。川は漸く京に近くなつた。

「その鼻を廻ると嵐山どす。」

と長い竿を舷の内へさし込んだ船頭が言ふ。鳴る櫂に送られて、深い淵を辷るやうに脫けだすと、左右の岩が自ら開けて、舟は大悲閣の下に着いた。(夏目漱石の「虞美人草」による)

五　高瀨舟

いつの頃であつたか。多分、江戸で白河樂翁公が政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつたらう。知恩院の櫻が入

相の鐘に散る春の夕べに、これまでに類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる住處不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類もないので、舟にも只一人で乘つた。護送を命ぜられて、一緒に舟に乘込んだ同心羽田庄兵衛は、ただ喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。

牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、この痩肉の色の蒼白い喜助の樣子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、庄兵衛をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐた。しかも、それが、罪人の間に

往往見受けるやうな、溫順を裝つて權勢に媚びる態度ではない。庄兵衛は不思議に思つた。そして、舟に乘つてからも、單に役目の爲に見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の擧動に細かい注意を拂つてゐた。その日は暮方から風がやんで、空一面を薇うた薄い雲が、月の輪郭をかすませ、漸う近寄つて來る夏の溫かさが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。

下京の町を離れて、賀茂川を橫ぎつた頃からは、四邊がひつそりとして、ただ舳に裂かれる水のささやきを聞くのみである。夜舟で寢る事は罪人にも許されてゐるのに、喜助は橫にならうともせず、雲の濃淡に隨つて光の增した

り減じたりする月を仰いで默つてゐる。その額は晴やかで、目には微かな輝きがある。庄兵衞はまともには見てゐないが、始終喜助の顏から目を離さずにゐる。そして、不思議だ不思議だと心の內で繰返してゐる。それは、喜助の顏が、縱から見ても、橫から見ても、いかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼さへなかつたら、口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衞は心の內に思つた。これまで、この高瀨舟の宰領をした事は幾度だか知れない。併し、載せて行く罪人は、何時も殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な樣子をしてゐた。それに、この男はどうしたのだらう。遊山舟にでも

乘つたやうな顏をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしやその弟が惡い奴で、それはどんな行掛りになつて殺したにせよ、人情として好い心持はしない筈である。この色の蒼い瘦男が、その人情と云ふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な惡人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いやいや、それにしては、何一つ辻褄の合はぬ言語や擧動がない。一體どうしたといふのだらう。庄兵衞にとつては、喜助の態度が、考へれば考へる程わからなくなるのである。暫くして、庄兵衞はこらへ切れなくなつて呼びかけた。

「喜助、お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」と答へて、あたりを見廻した喜助は、何事をか役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して、庄兵衞の氣色を窺つた。庄兵衞は自分が突然に問を發した動機を明して役目を離れた應對を求める言ひわけをしなくてならぬやうに感じた。そこで、かう言つた。

「いや、別に譯があつて聞いたのではない。實はな、俺は先刻から、お前の島へ往く心持が聞いて見たかつたのだ。俺はこれまで、この舟で大勢の人を島へ送つた。それは隨分色色な身の上だつたが、どれもこれも島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て一緒に舟に乘る親類の者と、夜通し

泣くにきまつてゐた。それに、お前の樣子を見れば、どうも島へ往くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだい。」

喜助はにつこり笑つた。「御深切に仰しやつて下すつて有り難うございます。なる程、島へ往くといふ事は外の人には悲しい事でございませう。その心持は私にも思ひ遣つて見ることが出來ます。併し、それは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私の致して參つたやうな苦しみは、何處へ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へやつて下さいます。島はよし

や辛い處でも、鬼の棲む處ではございますまい。私は、これまで、何處といつて自分のゐて好い處と云ふものがございませんでした。今度お上で島にゐろと仰しやつて下さいます。そのゐろと仰しやる處に落着いてゐる事が出來ますのが、まづ何よりも有り難い事でございます。それに、私はこんなにかよわい體ではございますが、ついぞ病氣を致した事がございませんから、島へ往つてから、どんな辛い仕事をしたつて、體を痛めるやうな事はあるまいと存じます。それから、今度島へお遣り下さるに就きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをここに持つて居ります。」かう言ひかけて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ付

けられる者には、鳥目二百文を遣はすといふのが、當時の掟であつた。喜助は語を繼いだ。

「お恥しい事を申し上げなくてはなりませんが、私は今日まで二百文といふお足を、かうして懷に入れて持つてゐた事はございません。何處かで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩き廻りました。それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして、貫つた錢は、何時も右から左へ人手に渡さなくてはなりませんでした。それも、現金で物が買へるのは私の工面の好い時で、大抵は借りた物を返して、後を借りたのでございます。それがお牢にはひつてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。私は、

それぱかりでも、お上に對して濟まない事を致してゐるやうでなりません。それに、お牢を出る時にこの二百文を戴きましたのでございます。かうして、相變らずお上の物を食べさせて戴きますれば、この二百文は使はずに私が持つてゐる事が出來ます。お足を自分の物にして持つてゐると云ふ事は、私に取つてはこれが最初でございます。島へ往つて見ますまでは、どんな仕事が出來るか分りませんが、私はこの二百文を、島でする仕事の元手にしようと樂しんでをります。」かう言つて、喜助は口をつぐんだ。

庄兵衞は「うん、さうかい。」とは言つたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これも暫くは何も言ふことが出來ない

で、考へこんで默つてゐた。

*　*　*　*　*

庄兵衞は彼此初老に手の屆く年になつてゐて、もう四人の子供がある。それに、老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生、人には吝嗇と言はれる程の儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目の爲に着る物の外、寢卷か拵へぬ位にしてゐる。併し、幸か不幸か、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで、女房は、夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、富裕な家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が滿足する程に、手先を引締めて暮して行く事が出來ない。ややもすれば、月末に

なつて勘定が足りなくなる。すると、女房が内證で里から金を持つて來て、帳尻を合せる。それは、夫が借財といふものを毛蟲のやうに嫌ふからである。が、さういふ事は、所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衞は、五節句だと言つては里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと言つては里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を塡めて貰つたのに氣付いては、好い顏はしない。格別平和を破るやうな事のない彼の家に、折折風波の起るのはこれが原因である。

庄兵衞は、今喜助の話を聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、

右から左へ人手に渡してなくして了ふと言つた。いかにも哀な氣の毒な境涯である。併し、一轉してわが身の上を顧みれば、彼と我との間に、果して何程の差があるか。自分も、お上から貰ふ扶持米を右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎないではないか。彼と我との相違は、謂はば十露盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有り難がる二百文に相當する貯蓄だに、此方にはないのである。さて桁を違へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。その心持は此方から察する事が出來る。併し、いかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のない事、足るを知つてゐる事である。

喜助は世間で仕事を見付けるのに苦しんだ。さうして、それを見付けさへすれば、骨を惜しまずに働いて、漸う口を糊する事の出來るだけで滿足した。そこで、牢にはひつてからは、今まで得難かつた食物が、殆ど天から授けられるやうに、餘り働きもせずに得られるのに驚いて、生れてから始めての滿足と感謝とを覺えたのである。庄兵衞はいかに桁を違へて考へて見ても、ここに、彼と我との間に大いなる懸隔のある事を知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折折足らぬ事があるにしても、大抵は出納の合つてゐる、手一ぱいの生活である。然るに、そこに滿足と感謝とを覺えた事は殆ど無い。

常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。併し、心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、大病にでも罹つたらどうしようと云ふ疑懼が潜んでゐて、折折妻が里方から金を取出して來て穴塡をした事などがわかると、この疑懼が意識の閾の上に頭を擡げて來るのである。一體この懸隔はどうして生じて來るのだらう。只うはべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、此方にはあるからだと言つて了へば、それまでである。併し、それは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵

衞は思つた。

庄兵衞は、只漠然と人の一生といふやうな事を考へて見た。人は身に病があると、この病がなかつたらと思ふ。その日その日の食にさへ並大抵でない骨が折れると、氣樂に食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又その蓄がもつと多かつたらと思ふ。かやうに先から先へと考へて見れば、人は何處まで往つて踏止まる事が出來るものやら分らない。然るに、それを今目の前で踏止まつて見せてゐるのがこの喜助だ。庄兵衞は、今更のやうに驚異の眼を見張つて、喜助を見た庄兵衞は、この時、空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。（森鷗外の文による）

六　人と境遇

農村の小學校では、春と秋とに、十日程づつの農繁期休業のある處がある。春の田植時、秋の稻刈時、この農家にとつて最も忙しい時には、子供でも一かどの役に立つからである。彼等の或者は、身體の不自由な老人の見とりをしながら、家の留守居をする。又或者は、田や畑に出て、微力ながらも、それ相應の手傳をする。更に又或者は、赤兒の守をするのである。

ついこの間のこと、或農村の小學校の先生から、さうし

た農繁期の間の經驗を書いた、或一人の女生徒の文章が、全級の女生徒を泣くまで感動させたといふ話を私は聞いた。その文章には、日が暮れて暗くなりかかつたのに、まだ田圃に行つてゐる兩親が歸つて來ないといふ、遣るせない寂しさが書いてあつた。背中に負うてゐる赤ん坊が、どんなにお腹がすいたのか、何としても泣きやまないので、自分もたまらなくなつて泣きだしたといふ、切ない悲しさも訴へてあつた。そして、背負うてゐる赤ん坊と共に、自分も泣きながら、寂しい畔道を行きつ戻りつしたといふ事も書いてあつた。田の中では蛙が鳴き、空には白い色をした月が出て居り、遠くの森にはもう巣に歸つた鴉の

鳴く聲が聞える、といふやうな事も書いてあつた。しかも、その文章を書いたのは、學校中でも最も劣等の部類に入れられてゐる、所謂低能兒に近い一人であるといふことであつた。そして、それに就て、更にその先生は次のやうな話をされた。

「そんなわけで、無論その文章の纏め方も、文字の使ひ方も、それからその書き方も、とてもお話にならぬ程まづくもあり、混亂もしてゐるものでした。併し、注意してそれを讀み判じて見ますと、まづざつと、さういふやうなことが書いてあつたのです。それで、私もかなり感動させられましたので、教室で皆に讀んで聞かせたのです。ところが、さ

ういつたやうな事は、田舍のことですから、大半の女生徒が經驗のあることでもあり、その上、その表現がひどく眞實味に富んでゐましたので、皆がひどく感動したものと見えまして、一樣に涙ぐんでゐました。併し、最後に私が『この綴方を書いた人は○○さんです。』と言つて聞かせますと、皆は一層驚きまして、一齊に溜息を洩らさずにはゐない位でした。そして、その事があつて以來、何といふことなしに、その文章を書いた劣等生に對する皆の態度が、よほど以前と違つたやうにさへ見えるのです。私はそれを大層悅ばしい事に思つてゐます。

劣等生――一人並に物を覺える事の出來ないために、

人間としての値打まで、皆無であるかのやうに取扱はれてゐる所謂劣等生は、全國到る處の小學校に幾人かづつ居る筈です。そして、其等の不幸な子供たちの多くは、單に智育の上ばかりでなく、あらゆる方面の教養に於て、常にのけものにされ、邪魔物扱にされてゐるのです。現に私なども、時時さうした心持で、彼等を取扱はうとしてゐます。併し、只今お話しましたやうな事件に遭遇して、深く考へて見ますと、私どものさうしたやり方が、如何に怖しい、如何に罪深いものであるかを、痛切に感じないでは居られません。知識の發達の上で、又は技能の發達の上で、如何に劣等な兒童であつても、これを一個の人間として見る時

は、彼等の内部にも、亦普通の兒童と同じく、時には遙かに美しい感情の働きのあることが窺はれるのです。それにも拘はらず、私どもは、とかく、その方面に於てまで、彼等をおいてきぼりにし勝ちなのです。それを考へて見ますと、我ながら全く怖しい氣が致します。かうして、多くの所謂劣等生は、徒に劣等生といふ特殊扱をされて、そのために、彼等の胸の奥に萌出でつつある、人間としての美しい心の芽生えまでもが、培はれもせずにゐるのです。何といふ情ないことでせう。

例へば、さういつた所謂劣等生の綴方にして見ても、單に字がよく書けないとか、言葉が纏まつてゐないとか、そ

して、教師にとつては、それを讀み判じたり、添削したりすることが、極めて厄介であるとかいふ理由のもとに、その拙い文字や纏まつてゐない言葉などの奥に藏されてゐる、美しい貴い心の芽生えまでもが無視されてゐることは、まことに、悲しく痛ましい事と言はなくてはなりません。私は、その事が、この頃になつて、たまらなく氣になり出しました。」

かういふ話を聞いては、私も深く感動しないでは居られなかつた。世間には、勿論先天的に物わかりの好くない子も少なくはあるまい。けれども、又不幸な境遇にあつて、物を理解する餘裕を與へられないために好く出來ない

子も多からう。であるから、銘銘の境遇の差異といふ事も深く念頭に置いて考へなければならない。卽ち、自由に存分に學習などの出來る境遇にあつて、心身ともに健全である者や、或はどんなに學習しようと念じても、その家の貧困の爲とか、その身の病弱の爲などで、心も身も十分に伸び伸びすることが出來ず、常に重苦しい氣分に包まれてゐて、とかく思ふやうにならない者もあるだらう。此等の樣樣な境遇の人人の間に、學校に於ける成績に、大きな差異の生ずることは當然である。

併し、かうした境遇の差異といふ條件を撤廢し得たなら、――勿論それは、この人間世界に實現し得られる狀態

ではないが、――恐らく、銘銘の感情にしても、理解力にしても、大した相違はないものとなるであらう。表面にあらはれた學校の成績といふやうな、只結果だけから、その人全體の價値を評定するといふやうなことは、正當であるとは斷じて言へない。けれども、如何にしても、萬人の境遇を同一にするといふは絕對に出來ないことである。隨つて、或一人の人の價値は、必ずや、その人の置かれた境遇といふものを知つた上で判斷しなければならない。

私はこの小學校の先生に聞いた話に關連して、世の中の事柄に就てもさまざまに考へさせられた。

（相馬御風の「野を歩む者」による）

七　詩二篇

一、新柳

空は瑠璃いろ雨のあと
並木の柳まんまろく
なびく新芽の淺みどり

すこし離れて見る時は
散歩の路の少女らが
ふかぶかとさすパラソルか

蔭に立寄り見る時は
春の日に舞ふ鳳(おほとり)の
雲から垂れた錦尾か

空は瑠璃いろ雨のあと
並木の柳その枝を
引けば眞珠の露が散る　（與謝野晶子）

二、若き聲

「あんよはお上手
ころぶはお下手」
五月の若葉の蔭に
聞える兒等の聲

何といふ爽かな
力ある叫であらう
いま幼兒はその生の第一歩を

專心に學ばうとして居る
五月の若葉とともに
我等も古い昨日の世界を忘れよう
そして常に新に常に雄雄しく
歩みゆくことを習はう

「あんよはお上手
ころぶはお下手」
五月の若葉の蔭に
兒等の聲はなほも聞える　（西條八十）

八　山莊雜記

一、山　莊

「何の物音もしませんね。……」ぢつと默つて、餘りな靜けさを味つてゐた爲に、暫くとぎれてゐた後の言葉を、私はかう言つて繼いだ。さうして「やつぱり、こちらへ移らして貰ひませうか。」と相談してみた。

「ではさう致しませう。机やお荷物などは後から皆運ばせます。」と、卽座にこの山莊の主人も同じた。

「此處は夜などは寂しい位ですが、とうからお出での支度をして置いたのですから。」とも言つた。

私がこの小豆島*に渡つて來たのは二年越の約束だつた。初、ここの主人から、內海の風光を見がてら、自分の家に逗留するやうにといふ好意の言葉を受けたにも拘はらず、その機會を見出し得ずに、今日に到つたので、その今日を島の知人達はどんなにか喜んでくれた。さうして、この主人は、山にある自分の別莊が、不便な事は不便だけれども、私の氣に入りさへすれば、そこに寐泊りしても可いと言つてくれたので、今朝はその山の別莊を見に來たのである。一足先に來た下女が掃除をして、障子を明放して置いた明るい座敷に坐つて、話しながら、これから暫くは、此處でゆつくり讀んだり書いたりする事が出來るのかと

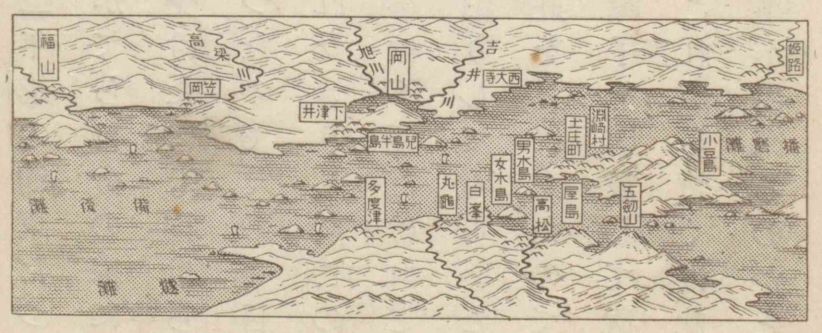
*瀨戸內海の備讃の間に橫たはる大きな島で、東西五里、南北二三里。香川縣小豆郡に屬する。

思ふと、私は、この上もない嬉しさの、胸にこみ上げて來るのを禁じ得なかつた。

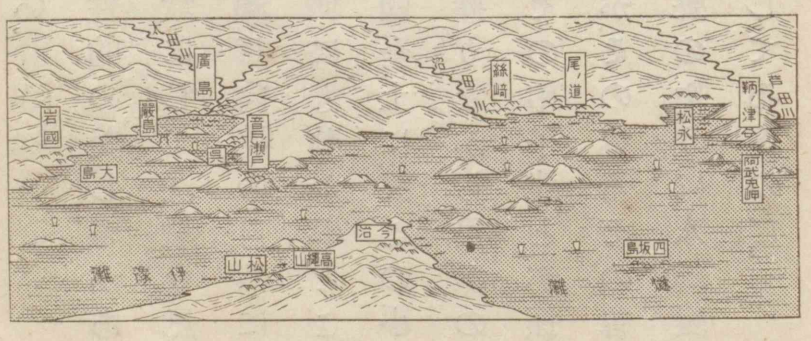
この別莊は、山の小徑を登つた處にある一軒家であつた。山の斜面には、蜜柑の樹がみつしり植ゑてある。中にも、家の入口に近いその數本には、大きく黃色くまるまると實つた夏蜜柑が、まだ枝ながらに垂れてゐた。

二、瀨戸內海

山は、北に屏風のやうな峯を負うたまま、南に向つて、なぞへに開いてゐるので、果樹の栽培には好いに相違ない。このあたりから下は、一面の麥畑で、それが海に近く低くなつた裾に、淵崎村の家の屋根が並んでゐる。淵崎に續いて土庄町が見える。そこには、右と左とから、池のやうに靜かな內海の水がくびれ込んでゐるが、右は深く狹い港をなして、船が出入をし、左は岬の一角から廣く沖に續いて、遠く讃岐の山山が霞んで見える。瀨戸內海の景色は、かや



*傾斜の意。



うな麗かな日に眺めるのにふさはしい。

瀬戸内海の自然は、典雅で、華麗で、女性的の美しさがある。けれども、單にそれだけではない。寡默にして沈毅な風を思はせる男性的の強さもある。私は瀬戸内海の自然にふさはしい人格として、弘法大師*は如何にも動かぬところであるやうに思ふ。大師の教化は、四國全土に、又この小豆島に、遍く潤されてゐる。神祕な鍵を握りながら、民衆の耳に入り易く說いて歩かれた大師と、その弟子達とが振る錫杖の輪の、ちりんちりんといふ音が、その昔、否その昔から今日まで、麥畑の空で鳴く雲雀の聲のやうに、永劫變らず、人人の心に大慈大悲の光を降らしてゐるのだ。

*平安時代の初に現れた高僧。空海。

三、鈴の音

りんりんと冴えた音が、遙かの山裾から、山莊にまで聞えて來る。それはお遍路さんが振る鈴の音である。お遍路さんとは、何といふ親しみ深い言葉だらう。四國八十八ケ所に殘された弘法大師の靈場を遍歷して歩くのが、お遍路さんである。併し、如何に信仰の爲とは言へ、四國を一周することは、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として、大抵の事ではないので、四國の代りに、この小豆島にある八十八ケ所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積み得るとされてゐる。「島四國」といふのがそれである。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かかるとい

ふ事である。多くは岡山から、若しくは高松から來るお遍路さんは、船で土庄港に着く。そこから發足して、第何番といふ札所の順に、參拜の路を辿るのである。菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆型に刻んだ金剛杖を持つて、少ないのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀のやうな海の光を受けながら、海に近い麥畑の中の路を辿つて行く。それは繪である。美しい繪である。この山莊にまで聞えるりんりんといふ冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものであらう。

四、お遍路さん

お遍路さんは、時を限らないが、日もうららかに、路を歩くのに好い氣持であり、又農事も比較的ひまな四月頃が一番多く見受けられるといふ事だ。この頃島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して來る。一體遍路といふものは何時の代から始まつたのか知らないが、大師の教門を弘くする上から言つても、各自の信心を厚くする上から言つても、善い事に相違ない。お遍路さんは到る處で愛せられる、

それぱかりではない。

又惠まれる。お遍路さん同志も、亦お互に遍路であるといふ事の爲に、信頼し合ひ、又扶助し合ふ。未知の人達が道づれになつて、相親しんで行く。路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預かつてくれる。しかも、その預け物の紛失したといふことがないさうだ。これは遍路として誰もが一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ處から來るのだ。この道に參するには、知識も、修養も、資格も、何もいらない。婆さんでも、娘でも、男でも、子供でも、ただ一つの道を信ずる事に依つて、この尊い心持に一致する事が出來るのだ。南無大師遍照金剛」と讃仰する聲が出て來るのだ。これは實に美しい事だ。爭や欺などの少なくないこの社會の中にあつて、信頼と扶助とに心を合せて行き得るといふのは、何といふ美しい、喜ばしい事であらう。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪として美しいだけではない。彼等が愛し合ひ信じ合ふ事に生きるが故に、その生活までが美しいのである。彼等は銘銘に自ら負はねばならない物を負うて、自分の名を書いた札を撒きながら、自分の路を遍歷してゐるのである。しかも、私どもの周圍には、このお遍路さんに見るやうな信頼と扶助とが果してどれだけ行はれてゐるだらう。私どもも、このお遍路さんの信と愛とを以て人生の路を歩きたいものだ。

五、山莊の夕べ

山莊の夕べはなかなか暮れない。薄明るい光が、何時までも麥の穗に漂うてゐる。少しでもその明りのある限り、雲雀が囀つてゐる。雲雀は子供だ。高い空にあがつて、自分が見て來た事を話しても、話しても、まだ話があるといふやうに囀つてゐる。可愛い鳥である。木立の梢にも、夕べの明りが殘つてゐる。どの木も、どの木も、銘銘に自分の芽を若い葉にひろげようとしてゐる。同じやうな綠といつても、よく見ると、その色の濃淡、調子が、それぞれに違ふ。形も勿論違ふ。かうして、どの木も自分の個性を伸ばして行くのだ。若芽のすばらしい生長を見てゐると、私達も怠けては居られなくなる。

六、夜

夜は、ランプを一つ、机に近く寄せて、本を讀む。ランプの光に向ふと、私の家にまだ電燈のなかつた頃の少年時代の事を思ひ出す。顏に火照を感ずる位に、ランプの心を明るく出して、細かい字の辭書を繰りつつ、むづかしい言葉の中から、正しい意味を掘出さうと努力したものである。あの時代ほどの讀書に對する熱心が、今再び私の心に燃えて來たやうだ。私どもが讀まねばならぬ、學ばねばならぬ事の豐かな積量が、私を興奮させる。溫良な默想的なランプの光に、机の上を照しながら、私はこの山莊の深夜に

湛へられた、限なく靜かな「時」を、限なく貴く感じた。

七、鳥の聲と谷の流

山莊へ來てから、四五日は氣が付かなかつたが、軒や窓の近くの蜜柑の木に、雀が來て宿るのを發見した。まるで締めきつてあつた一つの家に、私が起臥するやうになつてから、飯粒や洗ひ流し物などが捨てられるので、雀が此處に寄つて來たのではないかと思ふ。――或は前から居たのかも知れないが。――私がここに來てから、彼等も來たのであらうと思ふと、一層可愛い氣がする。とにかく、雀といふ鳥は、人なつこくて、可愛いものだ。この頃は鶯もよく鳴く。ごく近くまで來て鳴く。

一日、雨が降つた。こんな日は、寂しく心が冴えて、書きかけてゐる原稿の筆がよく進む。こんな日は、山鳩が來て鳴く。ぢつと耳を澄ましてゐると、不思議な言葉で、私に話しかけてゐるやうに思はれる。又、後の山では雉子が鳴く。けんけんと必ず二聲。

午後になつて、雨があがると、珍しく谷の水音が聞えた。門の外に出ると、いつも石ばかりごろごろとして乾いてゐる間を、僅に素麺のやうな水が流れてゐた谷川に、ぞつぞつと瀧のやうに落重なる水が溢れるばかりにたぎつてゐた。それには、詩興の涸れてゐた心に、ふつと感激が涌上つて流れ出た時のやうな、自然の喜が鳴つてゐた。かう

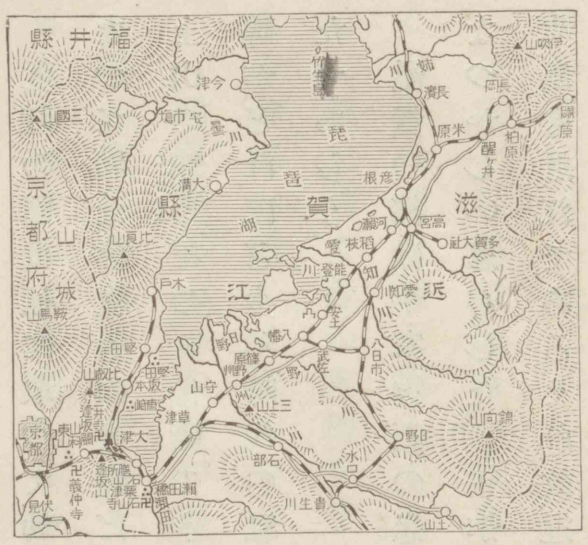
して、自然の喜に鳴つてゐる水の音は、机に向つて遠くに聞いてゐるだけでも快いものだ。（荻原井泉水の「山水巡禮」による）

九　近江の國

鬱陶しい雨がざあざあと美濃の野山を閉込めて、恐しく蒸暑い日の午後である。汗かきの私は、べつとりと脂のにじんだ顔を窓の外に出して、冷かな雫を、ほてつた兩頬に受けた。汽車は關ヶ原を出てから、間もなく近江の國に入る。兩側の平地には、菜の花が一面に咲亂れて、見渡す限り遠く續いて居る。近江の國一圓はこの菜の花畑で埋められて居るかと疑はれる。もし天氣の好い日であつたら、

(一) 東海道線下り列車の窓。
(二) 岐阜縣不破郡に屬する村。舊中仙道の一驛で、今は東海道線の一驛である。

(三) 琵琶湖。
(四) 滋賀縣阪田郡にある町。琵琶湖の東岸に位し、東海道本線と北陸線との連絡地として有名である。
(五) 滋賀縣犬上郡に在る町。琵琶湖の東岸に位し、米原の南二里。昔は井伊氏三十萬石の城下であつた。
(六) 滋賀岐阜二縣の境に聳え、標高一三七一米。
(七) 滋賀縣滋賀郡にあり、標高約一一〇〇米。
(八) 京都府と滋賀縣との境に聳え、海拔八四八米。



黄色い花が、目の覺めるやうに燃えて輝くであらう。

湖水の端の見え出したのは、米原を過ぎてからである。をりをり雨があがりかかると、白い雲の裏から薄日が光つて、譬へば幽暗な拜殿の奥の神鏡のやうに、青葉若葉の生ひ茂つた丘陵の蔭から、湖の面がきらきらと雲霧の中に窺はれる。やがて、遙かに彦根の城の白壁が、右手の小高い山の一角に現れる。伊吹、比良、比叡など、いろいろの神話

や傳説を想ひ出させる山山は、今日は朦朧と打煙つて姿を見せない。

近江の國は、私に取つて、幼い時分からあこがれの的となつて居た。伊吹山の大蛇だの、(一)勢多の唐橋の龍神だの、(二)三上山の蜈蚣だの、お伽噺の本に書いてある不可思議な口碑が、どれほど少年時代の私の頭に想像の火の手を煽つたであらう。

滋賀の都は「平家物語」の(三)忠度都落を讀むに及んで、一入なつかしい思がした。(四)經正が辨財天の靈驗に出遇つた竹生島も近江である。それ故、近江の國といへば、私はいつでも繪のやうな春霞が、湖水を周る山山浦浦に棚曳いて、明

(一)滋賀縣栗太郡にある地。
(二)滋賀縣野洲郡にあり、蜈蚣山ともいふ。海拔約四二八米。
(三)平忠盛の子。歌人左兵衛佐薩摩守であつた。壽永二年一ノ谷で戰死した。
(四)平經盛の子。和歌及び琵琶に秀でてゐた。この話は「平家物語」卷七に見えてゐる。
(五)琵琶湖の北部にある。そこに祠つてある辨財天は極めて有名である。

るい、暖かい、さうして何となくうら悲しい、夢のやうな土地を心に描いた。

奈良や京都の薄暗い古典的趣味を喜ぶ者は、あの麗かな近江の國を何と觀るであらう。鏡のやうな湖水の沿岸には、歴史的考證の束縛を受けない、自由な、豐富な、さまざまの神祕が潛んで居るやうだ。

八幡、(六)草津、(七)石山、(八)一つ一つの停車場に下りて、見物したいと思ふ處はあるが、とにかく一旦京都へ安着してからの事ときめて、私は車窓から脇目もやらず、移り行く風景に眺め入つた。

ああ近江の國。ちやうど菜の花のやうな、美しい傳説の

(六)滋賀縣蒲生郡にある町。
(七)滋賀縣栗太郡にある町。舊東海道と中仙道との分岐點にあたり、今は東海道線の一驛である。
(八)滋賀縣滋賀郡にある村で、そこには有名な石山寺がある。

生れた近江の國。私はこの國の風光を背景にした物語を一つ書いて見たい。

勢多の鐵橋を渡る時、ぱつと雲ぎれがして、琵琶湖遊覽の白塗の蒸汽船が、青青とした水面に小波を立てながら、目の下を走つて行つた。（谷崎潤一郎の「藝術一家言」による）

一〇　田舍の樂しみ

春は農家の人の最も多く活動する時であります。暗い寒い冬から、明るい暖かい春に移り變ると、農家の人は一時に緊張した氣分になります。

暖かい春風が吹き始めると、長い冬の間、冷たい北風に吹きさいなまれて、白く痩せこけて居た桑が、まづ芽をふくらませます。續いて、柳、桃、櫻、梨、桐、柿、いづれも言合せたやうに芽を張らせます。池の眞中の底の方に、一群に縮まつてぢつとして居た鯉は、水口の方へ出かけて行くやうになります。かうして、世の中がだんだん明るく元氣づいて來ます。

遠く東の方に連なつて居る、紫色の山の上に出る太陽は、日に日に暖かい光を田の面や桑畠の上に落します。凍つて居た田の土には次第に溫みが出て來て、桑畠は一面に綠になります。日の光は、又、私どもの煤けた先祖傳來の家にも、悠悠と溫暖を送ります。そして、寒暖計の昇つたの

に驚く頃になると、天井から吊りさげた蠶卵紙に、毛のやうな蠶が一面に生れます。

やがて、竹藪の中に、筍が土を破つて、何時の間にか頭を出します。一面に散らしてある藁を取除けると、柔かい土の中から、澤山の筍が、圓錐形の頭を擡げて、どれも、尖頭には、雛の嘴のやうな黄色い皮を戴いて居ます。見て居る中にも、伸びよう伸びようとして居る力が強く感じられて、誠に元氣に充ち滿ちてをります。

筍は、一日とは言はれぬほど、生長の早いものです。私どもは、この元氣の好い筍の頭を見つけようとして、あちこちを尋ねまはります。「あつ、ここにも。」「まあ、ここにも。」といふ

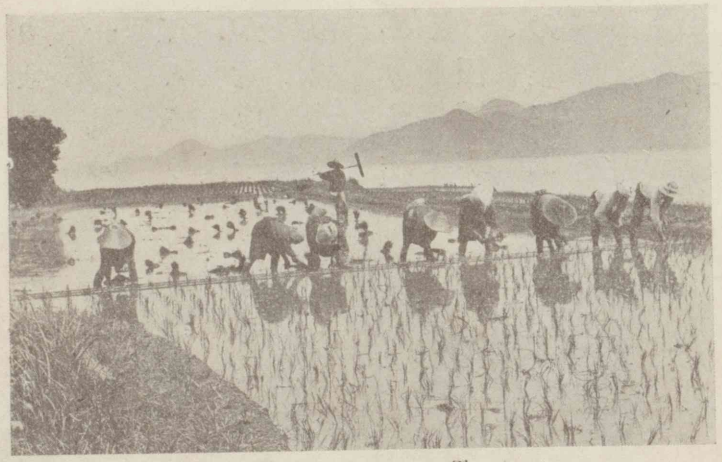
叫が連續して起ります。しまひには、後にも前にも、足も動かされぬほど、澤山に頭を出して居るのを見ることもあります。そして、それらは皆一雨毎に、ずんずん大きくなつて行きます。

さうなると、父が提灯を提げて、夜の見廻りを致します。竹藪の中に見える提灯の火影。この趣は、どうしても都の御方には想像が出來ますまい。私どもの屋敷三段歩の中、一段歩はこの竹藪です。京阪の間を旅行なさつた御方は、竹藪の樣子を御存じでせうが、竹藪の趣は、春雨に包まれた時に限ります。奥深い竹藪に絹絲のやうな春雨の降る樣子ほど、强い力を感じさせるものはありますまい。伸び

よう伸びようとする筍の力と、伸ばさう伸ばさうとする春の力とが、藪の中に漲つて居るのです。尖頭に露の玉を戴いた筍、くつくつと音がして、紫色の皮の剝げる筍、これらは、皆私どものものであります。

筍の出るのと同時に、養蠶が始まります、麥落しが始まります、田植が始まります。田植は苦しい中にも、亦面白みのあるものです。若い者も、年寄も、男も、女も、皆無邪氣に、一日、泥の中で働いて居る。それがまづ田植の面白いところです。歌ふ者もあり、囃す者もあるが、競爭の手は誰も休めません。植ゑをはつて畔に上り、ほつと一息して、腰を伸ばしながら、今の今まで、自分達が一致して働いて植ゑあげた苗が、井然として目の前に展開して居るのを見た時は、ちやうど畫家が綺麗な繪を書きあげた時の心持も、かういふものかと思はれます。

その中に、母と弟とが間食を持つて參ります。私どもは、多くの雇女の中に加はつて、蓑を敷いて坐つて、熱い握飯を食べますが、皆の舌鼓を聞きながら食べるのは、實においしいものです。正直に言ひますと、私ど



田植

もは、一年中で、この時ぐらゐ、おいしい御飯を頂く事はありません。そして、これが、世界中で一番簡單で、一番風流で、一番氣の利いた食事だらうと思ひます。箸もありません、皿もありません。二本の指と、掌と、鹽と、黄粉と、澤庵と、これが世界一の珍味とは、食べた人でなければ解らぬ事であります。時には、煙のやうな春雨の中で食事を取ることもあります。

田植がすんで一息すると、何時の間にか鮮かな綠の木の葉に包まれて、世はもう夏になつて居ます。

（五十嵐力の文による）

田　植（篠田柏邦筆）

一一　大樹

どんな樹でも、それが大樹とか老樹とか言はれるやうになりますと、人間でいへば、鍛錬された人格の重みといつたやうな、一種の力と味ひとが出て來ます。大樹はそのまま大地の圓柱で、私たちは、それに寄りかかりますと、さながら大殿堂の圓柱にもたれた時と同じやうな、落着いた莊重な感じを味ふことが出來ます。樹は語ります、樹はささやきます、樹はまた聲をあげて高らかに笑ひます。それを聞く事の出來ないのは、ふだん、樹に何の愛をも親しみをもつてゐない人か、さもなくば、土人形のやうな硬い神經をもつてゐる人に限るとも言へませう。

幾度か戰場に臨んで、幸にして生殘つて歸つて來た老兵士が、同じやうに足なみ揃へて敵前に立つた戰友のうちで、まづ右の一人が斃れ、次いで左の一人が傷つき、ばたりばたりとその後を追ふものが續出する中に、自分一人がかすり疵一つ負はないで、無事に凱旋した不思議さに驚歎せずには居られぬと話したのを聞いたことがありますが、その生存の不思議さは、同じやうに、老樹にも感じられます。それを、ただ運命のいたづらに過ぎないやうに考へてしまふ人もあるやうですが、それにしても、その運命を持ちこたへて、存分に自分を伸ばして行くだけの生命の力が、どうしても自分自身に備はつてゐなくてはな

りません。

私どもが大樹にもたれかかる時、着物を通して膚に感じる樹肌の冷たさから、何時も新鮮な木の葉の香から、言ひ知れぬ落ちつきを味ひながらも、どこかに一種の力强い威壓を覺えるのは、やがて大樹のもつてゐる生命の力が、暗默の間に私どもの上に働きかけるからではありますまいか。

常には餘りに靜かでおとなし過ぎる程の老樹が、どうかした拍子に、よく見ると、ちやうど猛獸の顏に見るやうな獰猛な表情をしてゐるのに驚かされる事があります。こんな時にこそ、土から生れたものの中で、最も偉大であ

り、最も長命である樹といふものの不思議な感情を、しみじみと感じさせられます。

私は郷里に小さな林を二三個處持つてゐます。それらの林には松だの櫟だのが生えてゐますが、何時も、冬が來ると、一年中の薪を其處から伐りだす事になつてゐますので、私は子供の頃に、樵夫について、よくその林へ出かけたものです。忘れもしませんが、今から三十五六年も前の事です。樵夫は、その林の入口にある、直徑一尺もあらうといふ松の樹を指ざして言ひました。

「今度はこの樹を伐りませう。すると、後の樹を伐りだすのに、大變都合がよくなりますから。」

私は振仰いで松の梢を見上げました。何の癖もなく、すくすくと背のびをしてつつ立つてゐる姿は、伐倒して薪とするのには、餘りに痛ましいやうでした。

「代りにほかの樹を伐らう。これはどうも可愛さうだから。」

私はたつて止めだてをしました。樵夫も不承不承に同意しました。その後、五六年といふものは、その林に斧を入れるたびに、樵夫と私との間には、その樹が物言ひの種になりましたが、その都度、私は無事にその樹を救つて來ました。

さうかうするうちに、樵夫もすつかり諦めたものと見

えて、その樹を伐らうとは言はなくなりました。たまに私がからかひ氣味に、

「もうこの松の樹も伐つて好い時分だな。」

と言ひますと、慌てて止めだてもしました。

「どうして、どうして、これは山のぬしですよ。」

その上に樵夫は、その樹の發達に邪魔になるやうな、あたりの枝などは、容赦なく拂ひのけて、その樹が思ふさま日光と風とを取入れる事が出來るやうに、骨を折つて居ることもありました。かうして、その松の樹はだんだん大きく、だんだん高くなつて行きました。

これは私の貧しい林の中にあつた一例に過ぎませんが、今方方に榮えたり生殘つたりしてゐる大樹の多くは、やはりかうした環境のもとに生長し、繁榮し、又殘存してゐるのではありますまいか。自然と人との双方の愛護と、樹木それ自らの生命の力とが、ぴつたりと合致しないでは、とても偉大をなす事は出來ないだらうと思ひます。

（薄田泣菫の文による）

一二　夢みる巣

榧の根の草を刈つてゐて、ふと青草の中に小鳥の巣が落ちてゐるのを見つけた私は、そつとそれを手に取つて見た。

小鳥の羽根だの、棕梠の葉だので、ふうわりと快く小さな巣が編まれてゐた。

指先でちよつとさはつて見たが、私はその刹那に何とも言へぬ快さを感じた。

毎日毎日朝から榧に來て鳴いてゐた小鳥があつたのに、今日はまだ來て鳴かない。もしか、これがあの小鳥の巣ではあるまいか。

それとも、雛を育てて、何處かの遠い空に飛んで行つてしまつた、渡鳥の巣でもあらうか。

かう想ひめぐらしてゐると、何時とはなしに、青い空や、廣い海や、涯もない沙漠の光景などが私の頭に描かれた。

それはどこの世界であつても好い、どんなに離れた遠い世界であつても好い。

小鳥はすこやかでゐてくれよ、親鳥も、子鳥も。そして、どこかの空で快く歌つてゐてくれよ。

私は、巣を離れて遠く飛去つてしまつた小鳥たちの上に幸多かれと心に祈りながら、落ちてゐた小鳥の巣をそつと懷に入れて歸つた。

快い巣、快い夢……。

どこかの世界で鳴いてゐる小鳥の聲が、私の耳に響いて來るやうであつた。（吉田絃二郎の「麥の丘」による）

一三　小鳥

小鳥の可憐な樂しい姿を見ると
捕へて飼つておきたくなる
けれども小鳥は
來るに任せよ去るに任せよ
それを捕へておかうとするな
たとへ飛去つて
もう歸つて來なくても可い
何處かでやはり樂しく歌つてゐるだらうから
若しやまた歸つて來たなら
氣ままに歌はせておけ
それを捕へようとするな
來り去り
樂しく歌へよ
小鳥たちよ
お前たちを捕へずに自由にしておくことは
更に私の心をも廣廣と自由に樂しくする　（宮崎丈二）

無智な者がさいきのあと詩である

一四　食卓の上

ある家庭の食卓の上に、菓物の鉢があるとする。その白い鉢に、紅い林檎が三つ、黄色いバナナが二つ盛つてある。そこへ、すがすがしい朝の光線が、開放した早春の窓から射し込んでゐる。かうした小景は、何時でも何處にでも見られさうであるが、考へると、ちやうどその通りの形で、その時間で、そのままの光と陰との中に置かれる至微至妙な機會といふものは、千萬年の間に、その時一度しか無いのである。このかたじけない尊い機會を、私どもは、決してかりそめに見過してはならぬ。若し、又、その食卓のまはりに、主人夫婦や、その子供達が團欒してゐるとする。これも日常の事ではあるが、ちやうどその通りの形で、その時間で、そのままの光と陰との中に置かれて、何か話したり、笑つたりしてゐる、その話題でも、互の動作でも、永遠の中での只一度の、再びとは見られない、その時だけの相であることを、まことに有り難いものとするだけの纖細性が缺けてゐてはならぬ。

さうした寸時にも、小さい蜘蛛の子などが、紅い林檎から幽かな絲をつけて下りたり、菓物の鉢の縁を歩いたりしないとは限らない。私どもは、よく、歡語しながら、何かの拍子に、目につけて、微笑したくなることがある。しかも、ま

た何かの話に釣込まれて、その幽かな子蜘蛛の存在などは忘れて了ふが、さうした時でも、その小さな一個の生物は、何時でも、その世界で、それ自身の營を光り輝くものにしてゐる。その一一の感情、智慧、動作、其等がやはりさうした瞬間に於ても、その食卓の林檎や、バナナや、主人や、妻子などと、唯一不二の微妙なつながりにあるのである。いや、日光や、蒼空や、大宇宙とも。

考へると、私どもは、身のまはりの一分時も粗末にしてはならない。此等を粗末にすることは、忽にして過去る一つの美の翼を、永遠に見落すことになるのだから。

（北原白秋の「季節の窓」による）

一五　蟲二題

一、馬追蟲

「お父さん、すいつちよ。」

と、長男が庭の隅の叢から馬追蟲を捕へて來て、二階の書齋にゐる私の側へ持つて來て見せた。若葉のやうに、體全體が青く美しい。子供はその美しい姿を私に見せようとして持つて來たものだらう。私は、その美しい姿を、一度美しいと思つて見てしまふと、もうそれ以上捕虜にして置く必要がないと思つた。子供も私の顏色からそれと察したと見えて、

「もう逃がしてやりませうか。」

と私に聞いた。私は、

「ああ、さうしておやり。草の中に居るものは、やはり草の中が好いんだから。こんな水氣のない座敷へ連れて來て置いては、可哀さうだよ。」

「さうね、お父さん、すいつちよは草の露を飲んで生きてゐるのでせうね。」

さう言つて、子供は窓から馬追蟲を放した。馬追蟲は嬉しさうに翅をばたつかせて、庭の叢の方へ飛んで行かうとしたけれども、子供の手を離れてまだ僅に二間とは行かないうちに、松の木の側を通りぬけようとするとたん

に、横合から雀が出て來て銜へた。さうして、それを銜へたまま、遠くの方へ飛んで行つてしまつた。あつけに取られてそれを見てゐた子供は言つた。

「お父さん、逃がしてやらなければよかつたですねえ。」

「うん。」と言つたきり、私は默つてしまつた。あの儘にして置いたなら、小さい子供等が見付けて、おもちやにして苦しめるだらうと思つたから、逃がしてやらせたのだ。逃がしてやつた事に何も惡い事はない筈だ。ただ折が惡かつたのだ。雀が近くにゐない時

馬追蟲

であつたら、あんな事は起らなかつた子供は善い事をしてやつたのだが、却て悪い結果になつたのだ。さういふ事は、この場合ばかりでなく、世間に幾らもある事だ。こちらは親切の積りでした事が、却て他人には悪い結果になる場合が少なくはない。子供はこの一事件によつて、一つの世の中の姿を學んだのだ。併し、私は親の身として、唯それだけの智慧を子供に得させたといふだけでは安心する事が出來なかつた。で、私は附加へて言つた。

「二階から放してやつたのが悪かつたのだ。どうせ放してやる位なら、今捕つて來た叢まで持つて行つて、あの草の葉にたからせてやればよかつたのだ。けれど、坊や、それは最初から捕らなければ一番よかつたのだね」

二、蜂

二階の硝子戸の腰板に、この夏の初頃から、足長蜂が巣を作つてゐた様子である。それを少しも知らずにゐて、私が發見した時には、既に偉大なものとなつてゐた。その巣の上には、二三十匹の蜂が何時もかぶさるやうにまつはつてゐる。私は珍しい物を發見したので、子供等にも見せてやらうと思ひ、

「お前達はまだ蜂の巣を見た事はないだらう。二階に蜂が巣を作つたから、見にお出で。」

と言つた。子供達は喜んで、ぞろぞろ梯子段を昇り、二階へ

來て、緣側へ出て、欄干の外へ首を出して、硝子戸の腰板を覗いた。その中の次男が、珍しがつて、何時までも見てゐた。すると、蜂はどう思つたか、飛んで來たと思ふと、いきなり次男の額に止つて、激しく刺した。次男は大聲を立てて泣きわめいた。私はそれを見ると、可笑しくもあつたが、腹が立つた。そして、その蜂を直に叩き落して、殺してしまつた。が、それだけでは勘辨出來ず、一匹も殘さぬやうに取迫めて、皆殺しにしようとさへ考へた。併し、向ふにも劍といふ武器があるので、うつかりかかると刺されるから、十分に準備を整へてかからなければならない。松火で燒殺さうか、黐でささうか、などと子供相手に評議した。

蜂に若し劍といふ武器がなければ、彼等も濫りに人を刺しには來まい。此方も亦先方を退治しようとは思ふまい。劍があるばかりに、敵を刺して恐れさせると同時に、彼等も遂には殺されるのだ。併し、劍があるからこそ、我我も彼等とは比較にならぬ大きな體をもち、又樣樣の攻道具を有してゐながら、うつかり手が下されない。蝶や小鳥などに對するやうな打解けた氣持で、我我が蜂に對し得ないのは、全くこの劍のためだ。

私は我我の心の中の劍といふやうな事に就ても考へながら、やはり何とかして退治してやらうと工夫を凝らした。（生方敏郎の「哄笑微笑苦笑」による）

一六　少年

友一の六つの年は、幼兒から更に少年らしい時期に移り行かうとする一轉機として、彼の小さい閲歴に、――三つ違の弟との關係上、かなりお兄様扱にされる場合がありながらも、要するに、その弟より稍大きい赤ん坊としか見られなかつた、過去の平凡な生活の上に、――著しい變化と様様な出來事や經驗を持來たしました。

繪畫を書く事、繪本を見る事、お伽話を讀んで貰ふ事、玩具を並べる事、弟と「きみ」――彼等の忠實な保姆――と鬼子つこをして騒ぐ事、庭を駈廻る事、ブランコや三輪車に乘る事、お天氣の好い日に、電車道の方や、近處の墓地や、田圃の方へ散歩に伴なはれる事、その序に掘割の傍にある「きみ」の實家の植木屋を訪問する事、弟との一寸した喧嘩、爭論、涙、和解、十時と三時との樂しみなお菓子、……彼の今日までの生活は、すべて此等の繰返しに過ぎませんでした。その他は、たまたまの外出、子供日の有樂座(一)を見物するとか、動物園(二)に連れて行つて貰ふとかを、その單調を破る時時の變化として、何よりも嬉しい事に數へてゐたのでありますが、その内に、追追一人前の少年として有らゆる欲望の擴がりかけた彼の心は、何となく今までの事だけでは滿足されない、飽足りなさを感じかけて來ました。單

(一) 東京市麹町區有樂町にあつた劇場である。併し震災の爲に灰燼に歸し、今その跡に新しく建つた劇場は邦樂座と稱してゐる。
(二) 東京の上野公園内にある動物園。

なる家の内外の駈歩きや、母親や弟や「きみ」などを相手の遊戯だけでは到底洩らしきれない力が溢れるやうになりました。

彼はあてどもなく何物をか求めようとする目を見張りましたさうして、巣の縁から高い青空や自由な森や野の方を思ひやる子鳥の心持で、外界を覗いて見た時、其處には自分の未だ立入るを許されなかつた様様の世界のある事を發見しました。中でも、最も強く彼の心を引着けたのは、路傍や、人の門や、又は掘割の橋の上などに固まり合つて、何時も愉快さうな會話をして騒いでゐる子供達の群でありました。殊にお稲荷様の横町と稱する電車道

から、友一の家のある郊外の靜かな通へ抜けようとする一條の狹い路は、左右に植木の下職人や、工場通ひの人達の混雑した小さな家のある處で、精悍な、敏捷な、愚直な、魯鈍な、あらゆる種類の人間の巣窟でありました。友一は、散歩の往き還りなどに、弟を負ぶつた「きみ」に連れられて、その傍を通る時、一種の緊張を感じないではゐられません。でした。彼は共鳴と好奇心と同時に、警戒の入混つた複雑な心持から、その群の方へ熱心な一瞥を投げて通るのでありました。

「杉田、杉田。」

「やあ、赤トルコ帽。」

人ずれのした少年の一群は、自分の仲間以外の者に對しては、きつと執るべき態度の如く習慣づけられた或種の敵意と、嘲弄的の示威とを、友一にも示す事を忘れなかつたものと見えます。これに對して、背中の弟が、彼等の反感の的となつた赤いトルコ帽の頭をもたげながら、ぼかんとした無邪氣な驚愕を報ゆるのに、友一は我となく顏を赤らめて、足早に彼等の勢力範圍を脱しようと努めます。さうして、それが成功した時、彼は怒と非難との面持で「きみ」に話しかけました。

「いけない子供達ねえ、悪口なんか言つてねえ。」

「きみ」は彼等が仕様のない悪戯兒であるといふ事や、純

良な善いお子様にならうとするには、決してあんな子供達と遊んではならないのだといふ事などを、極力訓戒するのでありますさう諭されますと、友一もそれを信じないではゐられませんでしたけれども、同時に、彼等を魅力ある好奇心の的とする事を禁ずる事も出來ませんでした。彼等のがやがやした喧騒や、亂暴な遊戯や、喧嘩や、嘲罵などの中には、自分の未だ知らない珍しい事や、面白い事の無數が、隱されてあるやうな氣がしました。春の末から夏へかけての陽氣に連れて、子供等の戸外の騒が盛んになればなる程、彼等の事がなほ多く目に觸れました。

「一緒に遊びたい。あの仲間にはひりたい。」

友一にはかう云ふ言葉を口にする勇氣はありませんでした。又、自分のこの頃の理由のない不滿や、あてどもない憧憬の底には、この一つの願望が横たはつてゐるのだといふ事を、自分ではつきり意識する事も出來ませんでした。それにも拘はらず、彼の目は戸外の新な對象――これまで殆ど異邦人視してゐた一群――の上を離れることが出來なくなつたのです。それと、今までの自分は、自分が如何にも幼稚な者として窃かに憫笑してゐる三つの弟と、大した差異のない境遇に安んじてゐた事を恥ぢるやうな氣さへ起りました。彼は、何かにつけ、兄らしく、年長者らしく、卽ち優越者らしく振舞はうと致しました。さう

して、そんな心持から、外出の折などにも、これまで賴りにしてゐた「きみ」の保護を輕蔑し始めました。彼はすべてに自由な、獨立した行動を取りたがり始めました。その一例として、初めて彼の自信ある決心を實行したのは、家から五六町の距離に在る郵便函へ、お父樣の手紙を入れに一人で行つた事でありました。

「お父樣、僕が行つて來ますよ。僕一人で行けますよ。きみやなんか來なくたつて大丈夫よ。」

彼は熱心に賴みました。今までは、郵便局について行つても、又赤いポストのぐるりと廻轉する、玩具のやうな面白い弧形の差入口に、手紙や端書を投込まして貰つても、

直接自分に命ぜられた用事ではありませんでした。それを、今度は、どうしても自分の責任を以て果さうとしたのであります。

友一は渡された二つの封書と一枚の葉書とを握つて駈出しました。床屋の角を曲つたり、湯屋の横町を抜けたり、電車道の橋を渡つたりして、首尾よくその信書をポストに入れて歸つて來た時には、彼はいつぱし大した仕事を仕遂げたやうな得意と誇とを感じてゐました。否、自分でさう感じたばかりでなく、父母や「きみ」たちからも、偉い事としてそれを褒められましたので、彼はもう有項天になつて、目を輝かして悅びました。（野上彌生子の「新しい命」による）

（一）「一かど」といふと同じ意味の俗語。

一七　森の繪

暖かい緣の椅子に凭りかかる。小枝の先に散殘つた枯れ枯れの紅葉が、目に見えぬ風に顫へてゐる。時に、蠅のやうな小さい蟲が、小春の日光を浴びて、垣根の日陰を斜に閃く。眩しくなつた目を室内へ移して鴨居を見ると、ここには初冬の森の繪の額が薄ら寒く懸つて居る。

中景の右の方は樫か何かの森で、灰色をした逞しい大きな幹は蠢蠢と立並んで、次第に暗い奥の方へ續く。隙間もない茂りの緣は霜にやや寂びて、えも言はぬ色彩が、梢から梢へと柔かに移り變つて居る。コバルト(二)の空には玉

（二）Cobalt. 青色の一種。

子色に綿雲が流れて、遠景の廣野の果の丘陵に紫の影を落す。森のはづれから近景へかけて、石ころの多い小徑がうねつて出る處を、橙色の服を着た豆大の人が長い棒を杖にして、前の五六頭の羊を追うてとぼとぼと出て來る。近景には低い灌木が處處茂つて、中には箒のやうな枝に枯葉が僅に食着いて居るのもある。あちらこちらに伐倒された大木の下から、眞青な羊齒の葉が覗いて居る。

平凡な畫題で、作者も分らぬが、自分はこの繪を見る毎に、靜かな田舍の空氣が畫面から流れ出て、森の香が漂ひ、鵯の叫が聞えるやうな氣がする。その外にも、まだ何か知らず胸に響くやうな鋭い感情の湧いて來るのを覺える。

二十年前の私の家のすぐ隣は叔父さんの屋敷、從兄の信さんの宅で、裏の竹藪の中の小徑を通れば、私の家と往來が出來た。垣の向ふから熟柿が覗けば、此方から烏瓜が笑ふ。藪の中に一本大きな赤椿があつて、鵯の渡る頃は、落散る花を笹の枝に貫いて、戰遊びの陣屋を飾つた。木の上に「はご」を仕掛けて、鵯を捕つた事もある。

叔父さんの家は富んでゐて、奥座敷などは二十疊餘もあつたらう。美しい毛氈が不斷に敷いてあつて、欄間に木彫の龍の眼が光つて居た。

何時か信さんの部屋へ遊びに行つた時、見馴れぬ繪の額が懸つてゐた。何だと聞いたら、油畫だと答へた。その頃、

田舍では油繪の石版刷は珍しかつたのだ。西洋畫と言へば學校の臨畫帖より外には見たことのない目に、始めてこの油繪を見た時の愉快な感じは忘れられない。畫は田舍の風景で、緩かな流の岸に水車小屋があつて、柳のやうな木の下に、白い頭巾をかぶつた女が家鴨に餌をやつて居た。「何處で買つたの。」と聞いたら、「町の新店に、こんな繪や、もつと大きな美しいのが澤山に來て居る。ナポレオンの戰爭の繪もあつて、それも欲しかつた。」との事である。

家へ歸つて、夕飯の膳についても、繪の事が心を離れない。黃昏時に、袖無を羽織つて、裏の藪で母と寒竹筍を拔きながらも、繪のことを思つて居た。薄暗いランプの光で筍の皮を剝きながらも、美しい繪を思ひ浮べて、淋しい母の横顏を見て居たら、急に心細いやうな氣が胸に涌上つて、睫毛に涙がにじんだ。「何故泣くの。」と母に聞かれて、なほ悲しかつた。「そんなに欲しいなら買つて上げます。男の癖にそんなことでは。」と諭されて、更にしやくり上げた。母は蟲壓への藥を取出して飲ましてくれたが、あの時の自分の心は今でも說明は出來ない。幼くて母親の手一つに育てられ、餘り豐かでない生活が朧げに胸にしみ、それに晩秋の木枯さへ既に周圍に迫つて居たから、何かの刺戟は直に譯の分らぬ悲しみを誘うたと見える。

繪を買ふことを許されて、翌日學校へ行つたが、歸りに

買ふべき繪の事に心を奪はれ、教場で先生に何か聞かれても耳にもはひらぬ事さへあつた。放課のベルを待ちかねて學校を飛びだし、信さんに教へられた新店を尋ねたら、すぐ知れた。店へはひると、一面に吊した繪のニスの香に醉うてしまつた。あれも好い、これも氣に入つた。鍛冶屋の煙突から噴出る眞赤な焰が黑い樹に映えて、遠い森の上に青い月が出て居る繪も欲しかつたが、如何にも靜かな穩かなこの森の繪にきめた。額緣にはめて貰つて、その上を大事に新聞で包んで店を出た時は、心臟が高い音を立てて踊つて居た。

歸途に舊城の後を通つた。お城の杉の梢はちやうどこ

の繪と同じやうなさびた色をして、壕の石崖の上には、葉を振ひ落した椋の大木が、枯菰の中の冷たい水に影を落して居た。壕に隣つた牧舍の柵の中には、親牛と子牛とが四五頭愉快さうにさまようてゐた。自分も何となしに嬉しくなつて、口笛をぴゆうぴゆうと鳴らしながら、飛ぶやうにして歸つた。

森の繪が引きだす記憶には際限がない。堅一尺横一尺五寸の粗末な額緣の中には、あらゆる幼時の美しい幻が疊み込まれて居る。又折にふれては、その幻が畫面に浮び出る。現世の故郷は移り變つても、繪の中に寫る二十年の昔はさながらに美しい。外の記憶が薄れて來れば來る程、

森の繪の記憶は鮮明になつて來る。

他郷に漂浪しても、この繪だけは捨てずに持つて來た。額縁も古ぼけ、紙も大分煤けたやうだが、森の繪は、繪の持つ情味は、何時でも新しい。（吉村冬彦の「藪柑子集」による）

一八　繪畫の感化

下總國の古河（一）驛に、その氏は忘れしが、茂足といふ歌人ありき。その人、二十年ばかりの昔、陸奥に來りて物語せし事ありしを、今思ひ出でたれば、書きつづりて人人に見せ參らせん。

茂足、若き時、京へ上るに、近江の石部（二）と水口（三）との間に「萬

（一）茨城縣猿島郡にある町。昔は奥州街道の要衝に當つてゐたが、今も東北本線の一驛で、にぎやかである。

（二）（三）共に滋賀縣甲賀郡にある町で、東海道五十三次の一。

（四）藤原氏。後醍醐天皇に仕へて忠誠を致した人。

里小路藤房卿古跡」と彫りたる碑あるを見しかば、その跡のゆかしさに、尋ね入りて見るに、觀音寺といふ寺ありて、そこに卿の念じ給ひしといふ觀音を安置せり。

その御佛の御前に、われより先に、旅人と覺しき五十餘歳の男入り來りて、何事を歎くにか、さめざめと泣きゐたり。うちつけにその故を問ふべくもあらねば、立去りて本の驛路に出でぬ。頃しもきさらぎの初なりければ、日影あたたかなるところ見出でて憩ひ居たるに、かの男も出で來ぬ。茂足の「日影も暖かなり。ちと休み給はずや。」といふに、かの男會釋して、同じ處に腰うちかけたり。しばし四方山の物語して、さて後に「さきには觀音寺にて見かけ參らせ

しが、かの卿には深き御由緣（ゆかり）などおはしますにや。」と問ふに、恥ぢらひたる氣色にて、「さてはあやしき歎せしをや見給ひけん。賤しき身のいかでさるたふとき御方に由緣などいふことの候べき。但し今日しも不圖思ひ出でしことありて、涙せきあへざりけるを、恥しくも怪しまれ候ひけん。懺悔には罪も滅ぶと承れば、若き時の罪滅ぼしに、道すがら語り申さん。」とて、諸共に立出でぬ。

この男は津の國大阪の人にて、幼かりし時に父母を喪ひ、高麗橋あたりの商人の家に奉公してありけるが、その家の子は遊蕩に耽りて、家繼がすべくもあらぬさまなりしかば、父は怒りて勘當しけれども、母は一人の男子ゆゑ、

流石にいとしがりき。上總の東金（こがね）に出店あれば、そこを守る人に竊かに賴みやらんとは思ひよりしが、遙けき旅路を一人遣らんも心もとなくて、この男召出でて、「そなたは御兩親ともに世にまさねば、何處に住むとも心安からん。後には必ず家分けて得さすべし。しばしがほど、わが子に具して上總の方に行きてよ。」とて金二十兩預けられたり。さて、その子と共に大阪を出でたれども、若き人の習にて、勘當受けし身のなほ過を悔いもせず、ほしいままに振舞ひければ、中仙道の蕨驛（こ）に來りし頃は、その金も殘少なになりにけり。

明日江戸より船出せば、東金に渡らんこと難からじな

(一) 千葉縣山武郡の略。中央にある町で、千葉、銚子、勝浦の三街道の交叉點である。

(二) 埼玉縣北足立郡にある町。今は東北本線の一驛である。

ど聞くにつけても、行末の事を思ひ續くるに、かかる賴もしげなき人に具して、出店に行きたらんには、たとへ母刀自の書ありとて、同じ仲間の惡者とも思はれん。よしさは思はれずとも、この人の心なほらぬ程は大阪にもえ歸るまじ。とにもかくにも、よしなき人に伴なひて遙かにも來にけりと、悔しさ限なかりしが、また思ふやう、身を立つる便り求めんには、江戸にまさる處やはある、ここまで來しこそ幸なれ、今宵の中にこの人を棄てて奔らばやと思ひしかど、しばしの程も貯なくてはいかがはせん、かくと知りなば、預かりし金ある内にとにもかくにもすべかりしを、後れにけりと、又更に悔しがりけるが、この人の脇差は、

その父の物好きより、百兩餘のつひえもて造りたる物なることを思ひ出でて、よしよし、これを盜みて賣代となさんには、十日二十日の日を送るに難き事はよもあるまじと、心一つに謀りすまして、さらぬさまにもてなしつつ、今宵かぎりの旅寢なれば、などいひ拵へて、酒勸めて寢させたり。

夜ふけて後に、そと起出で、枕邊に忍びよりて窺へば、立てまはしたる屏風の内に、鼾の聲のみ聞えたり。時こそよけれと、徐に屏風に手を懸けて引きあくるに、内より行燈の火影のさとさし出でて、後の襖障子に映りたるを、人や來ると驚きて顧みれば、今までは見も入れざりしその襖

*京都府相樂郡にある山。

後醍醐天皇の笠置落（小堀甎音筆）

に、藤房卿の笠*置より後醍醐天皇の御供して、大和の方に落ち給ふとき、松蔭に袖敷きて、その上に帝を寢させ奉りし形を畫きたるなりけり。この男これを見て、あな淺ましかかる尊き御方だに、君の御爲には、習はぬ憂目をも見給ふものを、いかなれば、われは主の物盜まんとまで思ひしぞと、悔しくも淺ましく覺えて、いねたる人の枕邊にぬかづき、繰返し繰返しその過を打詫びたりき

「かくて東金に到りて後も、憂きことあればこの夜の事を思ひ出でて、六年七年過ぎたりしに、その人も心改まり、家に歸りて父の跡を繼ぎしかば、我も約束の如く家分けて與へられたり。それより次第に仕合せ好く、今は家業も子に任せて、あかぬ事なき身にはなりたれど、さてのみ徒にあらんもいかがなれば、折折はここらあたりまで物をあきなひにまゐるなりされば、何時とてもこの御寺には詣でぬれど、今日しも不圖思ひ出づれば、若しその折しも

この卿の御姿を見まゐらせずば、いかでかく事なくて世にはあらるべきと、かたじけなさに涙とどめかねて、君にも怪しまれ候ひぬ。われは賤しき生れながら、若き時より軍物語の書讀むことを好みければ、その時しもこの卿の事を思ひ出でて、よからぬ心を改めぬ。よりて、子供等にも物讀むことは常に嚴しく掟て候。」と語りけりとぞ。

茂足はその頃四十ばかりの人なりき。（那珂通高の文による）

一九　富籤

文政五年十二月二十三日、小石川水道橋の輕士で、井上半次郎といふ者が、春の準備のため、淺草藏前の札差業板

(一) 仁孝天皇の御字の年號。（一八一七―一八四九）
(二) 江戸時代に、旗本や御家人の祿米の請取方やその賣買を請負ふ業。

倉屋文右衛門方へ行き、御切米の賣上代金二兩を受取り、つまらなさうな顏をして、しをしをと本鄕湯島切通阪へ差掛つたと、天神境内は黑山のやうな人だかり。建札に「金千兩の富籤興行」とある。これを見た半次郎には、むらむらと射利心が兆した。二兩の内一分を捨てた積りで、札を一枚買はうかと思つたが、當らなければ、元も子も無くなるのだから、一分の金がふいになれば、夫婦三四日間の内職で埋合せなければならないと、半次郎は人波に揉まれて劍突を食ひながらも、さすがに考へた。

その頃の富籤といふものは、先づ興行者側の世話人總代と、寺社奉行の家來で、大檢役、小檢役と云ふ役人と、それ

(三) 江戸時代に、領地を有せぬ旗本や御家人などに、祿米を年三季に切つて渡した米。

サジキ
カケ
ドン

に、烏帽子、直垂を着けた天神様の神主まで立會つて、臨時仕掛の棧敷の上へ投票箱を擔ぎ出し、十分内部の番號札を搔廻した上で、箱の一方に開いて居る小さな孔から長い揉錐を突込んで、それで突當てた番號札の持主に、千兩の賭金を與へるといふ仕組。札は五千人分あるから、その刹那まで緊張し切つた場内の貪慾氣分が、次の瞬間には、一番札千兩、二番札百兩、以下十兩札數枚と、都合十人の滿足に、四千九百九十人の失望、嫉視、自暴、自棄の、あさましく物凄い氣分に一變するのである。

とうとう半次郎は思ひ切つて、一枚買つて入札した。開票までには時間があるので、番號引換證を受取つて歸宅

*今日で言へば、號外賣のやうな者。

した。夕餉の膳に向つて、一分なくするか、千兩取るか。俺も聟に來て以來、女房に着物一枚買つて遣らず、十五俵扶持の不足を、夫婦が提灯張の手間賃で補つて行くとは情ないと鬱いで居る處へ、表を「お話お話」と叫んで瓦*版賣が飛んで行く。早速一枚買つて見ると、千兩の當り札は四千四百四十四番と、自分の番號が出て居るではないか。半次郎はもう逆上して了つた。追取刀で湯島天神へ飛出さうとしたその袂を女房のお松がしかと捕へて、事情をただすと、「富が當つたから、今年の正月は餅も澤山搗ける、鮭も味噌も澤山に買入れ、其方にも着物を買つて……。」など、半次郎がたわいのない事ばかり言ふので、富籤といふものが

お松の腑に落ちるのは容易な事でなかつた。

併し、ほぼ飲込がつくや、お松はきつとなつた。「それでは、十人程の人が喜ぶ裏には、四千九百餘人の歎があるのですね。たとへ十五俵でも、井上の家は祖先以來御譜代の御家人です。貴方も小祿は御承知の上で養子に來られた筈です。よしやそのままで一生を終られても、恥しくは御座いますまい。日頃から、(一)不義にして富み且つ貴きは浮雲の如しと、聖人の訓を口癖にせられるお心掛に魔がさしましたか。連添うて今日まで五年が間、見上げた武士と敬うて來ましたけれど、只今の卑劣なお振舞には愛想が盡きました。」と、引換證を見るも汚らはしさうに火鉢に投入れ、

(一) 論語述而篇に出てゐる孔子の語。

「それで御立腹なら、御手討に遊ばせ。」と言ひだした。半次郎の器量の悪さは一通りでないが、元來が素直な男であるから、忽ち「ああ、面目次第も御座らぬ。この富籤には毛頭未練は御座らぬ。」と、(二)八角になつて詫びた。一方、天神境内の興行場では、親籤の申し出がないので、芋の子の煮えるやうな騒だつた。

この事は瞬く間に公儀に知れ、翌年正月十七日の御用始に、半次郎は御小人目付を拜命し、終に長崎奉行まで累進した。これが卽ち備前守の前身である。曾て、一分の富札を買つて僥倖を夢みた半次郎は、晩年、德川幕府の財政を司管する御勝手掛御勘定奉行として時めき、遂には三千

(二) 極めて嚴正な姿勢になることを「四角になる」といふのであるが、それを更に誇張して「大いに畏まつた形」を言つたのである。

石の大身となつた。併し、何處まで行つても、お松夫人の方が器量がすぐれて居たやうである。（矢田挿雲の文による）

二〇　形

攝津半國の主であつた松山新助の侍大將中村新兵衞は、五畿内中國に聞えた大剛の士であつた。

その頃、畿内を分領してゐた筒井、松永、荒木、和田、別所などいふ大名小名の手の者で、槍中村を知らぬは恐らく一人もなかつたであらう。それ程、新兵衞はその扱きだす三間柄の大身の槍の鋒先で、魁殿の功名を重ねてゐた。その上、彼の武者姿は、戰場に於て水際立つた華やかさを示してゐた。火のやうな猩猩緋の鎧を着て、唐冠纓金の兜を被つた彼の姿は、敵身方の間に輝くばかりのけざやかさを持つてゐた。「ああ、猩猩緋よ、唐冠よ。」と、敵の雜兵は新兵衞の槍先を避けた。身方が崩れ立つた時、激浪の中に立つ巨巖のやうに、敵勢を支へて居る猩猩緋の姿は、どれほど身方にとつて頼もしいものであつたか分らない。又嵐のやうに敵陣に殺到する時、その先頭に輝いてゐる唐冠の兜は、敵にとつてどれほどの脅威であつたか分らない。かうして、槍中村の猩猩緋と唐冠とは、戰場の華であり、敵に對する脅威であり、身方にとつては信頼の的であつた。

或日、元服してからまだ間もないらしい年若な侍が、

「新兵衛殿、折入つてお願が御座る。」

と新兵衛の前に手をついた。新兵衛は、

「何事ぢや、其方と我等との間に左様な辭儀は入らぬぞ。望といふを早く言うて見い。」

と、はぐくむやうな慈顏を以て相手を見た。

「外の事でもをりない。明日はわれら初陣ぢやほどに、何ぞ華華しい手柄をして見たい。就ては御身様の猩猩緋と唐冠とを貸してたもらぬか。あの鎧と兜とを着て、敵の眼を驚かして見たうござる。」

「ははは、念もない事ぢや。」

と新兵衛は高らかに笑つた。新兵衛には、相手の子供らしい無邪氣な功名心を快く受入れることが出來た。

「だが、申して置く。あの鎧や兜は、申さば中村新兵衛の形ぢや。其方が、あの品品を身に着ける上からは、われら程の肝魂を持たいでは叶はぬことぞ。」

と言ひながら、新兵衛は再び高らかに哄笑した。

その翌日、攝津平野の一角で、松山勢は大和の筒井の軍勢と鎬を削つた。今に戰が始まらうとする時、何時もの如く猩猩緋の武者が唐冠を旭に輝かしながら、敵勢を尻目にかけて、大きく輪乘をしたかと思ふと、駒の頭を立直して、一氣に敵陣に駈入つた。吹分けられるやうに敵陣の一角が亂れた處を、猩猩緋の武者は槍をつけたかと思ふと、

もう三四人の端武者を突伏せて、悠悠と身方の陣へ引還した。

その日に限つて、黑皮縅の鎧を着て、南蠻鐵の兜を被つた中村新兵衞は、會心の微笑を含みながら、猩猩緋の武者の華華しい武者振を眺めてゐた。そして、自分の形だけですらこれ程の力を持つて居るといふことに、かなり大きい誇を感じてゐた。彼は二番槍は自分が合さうと思つたので、駒を乘出すと、一文字に敵陣に殺到した。ところが、猩猩緋の武者の前には戰はずして浮足立つた敵陣が、中村新兵衞の前にはびくともしなかつた。その上に、彼等は猩猩緋の槍中村に突亂された恨を、この黑皮縅の武者の上

に復讐しようとして猛り立つた。

新兵衞は平生とは勝手が違つて居ることに氣がついた。何時もは、虎に向つて居る羊のやうな怖氣が敵にあつた。彼等が狼狽して血迷うてゐるところを突伏せるのは、何の造作もなかつた。今日は、彼等は對等の戰をする時のやうに勇み立つてゐた。どの雜兵も、どの雜兵も、十二分の力を新兵衞に對して發揮した。二三人を突伏せるさへ容易ではなかつた。敵の槍の鋒先が、ともすれば身をかすつた。新兵衞は必死の力を揮つた。平素の二倍の力をさへ揮つた。併し、彼は屢、打負けさうになつた。氣輕に兜や鎧を貸したことを後悔するやうな心が、頭の中を掠めた時であ

つた。敵の突きだした槍が鎧の裏をかいて、既に彼の脾腹を貫いてゐた。（菊池寛の「極樂」による）

二一　春

「すつかり春になつたなあ。」

妻がちよつと買物に出かけた留守、眠からさめて大聲で泣きだした赤ん坊を抱いて、久しぶりの休日に、書齋の縁側へ坐りながら、私は思はず獨言した。

三月も下旬にかかつた午近くの春の日が、張りのべた玉のやうに、みづみづした光澤を含んだ青空から、軒先を越して、まるで輝いた雨脚のやうに、私の坐つてゐる縁側の全面へ降りそそいでゐる。縁板からは柔かい煖爐の蓋の上へでも身を置いたとでも譬へたいやうに、快い暖かさが、ぬくぬくと煙のやうに涌上つて來る。直接日にあたつてゐる着物やシャツの部分は、今にも焦げて匂ひ出して來るかとばかり熱い。

「ほら、好い氣持だらう。」

ふと、その時、縁側の先の豐かに濕りを含んだ僅ばかりの庭の黑土の上をぼんやり眺めてゐた私は、泥まみれのまま置かれて、枯れきつたやうにどす黑くなつた、小さな一本の木瓜の植わつた素燒の大鉢に目をとめた。

その木瓜は、一昨年の春の初、私共がまだ郊外の家に住

んでゐた頃、或小（ささや）かな種物屋の店先で見つけて、買つて來た物である。その時、低い木に濃い白色の重さうな花が見事に咲いてゐるのを見て、私はいそいそ家へ持つて歸つたが、それから間もなく、その片方へ突出てゐる一本の枝を、朝の掃除の時、過つて妻が箒で折つて了つた。

不器用な妻は途方に暮れたやうであつたが、わづか表皮だけでぶらさがつてゐる折れた枝を、白紙を裂いて幾重にもぐるぐると捲き、その上を固く絲で縛つて、もとの恰好にくつつけたが、その後、また妻の不注意で、雨の夜に鉢を外へ出しぱなして置いたりしたため、僅に命脈を保つてゐた負傷した枝は、年の暮にとうとう腐つて了つた。

たつた左右二本しかない枝の一本を失ひながらも、木瓜は枯れずに、去年の春また微かな芽を吹出した。併し、それはただ綠の葉ばかりだつた。今に出て來るか來るかと心待に待つたが、只一個の蕾さへ着け得ないで、乏しい小さな奇形な葉だけが、夏へかけて硬く黑ずんで行つた。

去年の暮に迫つて、此處に引越して來る時、私共はその鉢を、かさばるため、火鉢――まだ細かい火の少なからず殘つてゐる――の中へ突込んで、他の道具と一緒にごたごたと引越車の上へ積んで來た。着いてから取りおろした時には、灰の熱で鉢もかつかつと熱くなつて、おまけに途中のぬかり道でさんざ搖られたと見えて、まるで雪で

も降りかかつたやうに、木は頭から灰をかぶつてゐた。「こりや愈、駄目だ。」それを見て、殆ど絶望した私は、打捨てたままにして置いたのである。

然るに、まだこの世界の何處かに殘つてゐる暗い冬の姿を見せてゐるやうな今に於て、鉢の木に目を止めた私は、ふと片一方へだけ重みの延びた見すぼらしい木の項に、まるで豆粒のやうな圓みと大きさとを持つて、重なり合つた三つばかりの白い物を認めた。

「蕾かも知れない。」

私は、更にその圓い小坊主のやうな、絹のやうな鋭い光澤をもつた、ふくらんだ物體を見詰めた。まさしく蕾だ。か

の女が――若しその香の高い花の咲いた小さな木を女性で呼べるなら、――實に二年ぶりで現した生命のしるしに相違なかつた。

「ほんとうに春だ。」

たまらない嬉しい發見をしたやうに、同時にしみじみ春を告げられたやうにつぶやいた私は、又今度は抱いてゐる幼兒を眺めた。赤ん坊は何時の間にか泣止んでゐたが、日向の方へ顔を出されて、餘り眩しいので、顔中をしかめて、二つばかり續けざまにくさめをすると、その肉體に起つて來た變動におびえて、また泣き始めて居た。

「泣くな、泣くな。」

不器用にゆすぶつてやりながら、奇妙な風に口を四角にゆがめて、べそをかいてゐる男の子の顔を見て、私は笑ひ出した。

「そんなに氣が弱くてどうする、男の癖に。そんなことで、大きくなつて世の中が渡れるか。」

そんなことを言ひかけながら、私はまた庭を眺めた。

これまで長い間、私どもは隨分苦勞して來た。貧乏や病氣や孤獨や、或時はもうこのまま起てなくなるかと思つた事さへあつた。郊外の暗い家に閉籠つた二三年間の毎日の陰鬱な生活、前途に何一つ光明の認められなくなつた苦い絶望。けれども、人生の道は悠久であつたにつちもさつちも動けなくなつてしまつたと思つた處に、人間の力では思ひも寄らない新しい途が開けたその目に見えない確な運命の手で、今再び私共の生活が開けて來た。子供まで育てて行け、又かうやつて長い寒い冬も次第に通り過ぎて、暖かく朗かな明るく生き生きとした春にも再び巡り合ふことが出來てゐた。

が、その春の悦は私共だけのものではなかつた。この世界に生きる努力を、私共と一緒に續けて來た物があつたのだ。あの何の罪もなくて重く痛められた木瓜の木。あの如何にも怪我人のやうに疵を薄紙で繃帶されて、しよんぼり立つてゐた寂しい木。とうとうその腕までなくした

上に、引越の時、熱い灰を頭から被つてゐた木、そのまま打捨てられ、忘れられて、疵口といはず、根といはず、荒い雨風に吹晒され、蟲の蝕むに委せられながら、何時かまた濃く厚く白光のする花を盛返さうとしてゐる木。

何といふ強大な力だらう。さうして、その小さな植物の努力が、私共の努力より更に大きく、その髓の中に音もなく燃えるだらう悦が、私共の悦より更に深くないと、どうして言へよう。

併し、それもこの木瓜ばかりのことではない。恐らく、この世の中に生きてゐる物の總てにこの力は漲つてゐるのだらう。それによつて、總ての物が伸び、はじけ、動き、叫び、

躍つてゐるのだ。今、春の時節に會つて、一際強く生き生きとざわめいてゐるのだ。

不骨な手に抱かれて、そのまま泣きやんだ幼兒のからだを、ただ惰性のやうに搖動かしながら、見てゐれば居るほど、すごい白い光の增して來るやうな、いきなり大きくなつて、譯の分らないことでも言ひかけて來さうな木瓜から、私はなほ廣い空間へ目を移した。

すぐ前に、薄い柔かい處處焦げたやうに黃ばんだ檜葉の垣根が、隣家の輝いた屋根瓦を辷つて落ちて來る日光に照されて、木炭色の不揃な影を地上ににじませてゐる。その垣根のやや端によつた處から、隣の家の一本の大き

な桃の木が曲つてのしかかつてゐる。何の木か、ろくろく見分けもなく過ぎて來たその木の、擴がつた枝といふ枝をめぐつて、ぶつぶつと一ぱい、眞白くて圓い蕾がくつついてゐる。開き切るには間がありさうだが、どれもが低くつぶやいてゐるやうに、固くて、彈力があつて、力強く木に生れた無數の「できもの」たちは、一樣に空へ金屬性の光澤を反射させてゐる。

白桃の木から、垣根の此方側の、すらりと高い一本の樫へ目を轉じた。下枝を切拂つた、そのまだ若い常磐木は、如何にも上品に、小高い處にきちんと細長い葉を積重ねてゐた。ちやうど、私の家の軒先へかくれた太陽は、その木の

カンカン

天邊あたりにかかつてゐるらしく、青空にたつた一かたまり浮いた眞白い雲を、燃立つかとばかり眩ゆく輝かせて、その餘つた光で燦燦としたプラチナ色の放射の圓を木へ描いてゐた。

黑ずんだ多くの葉は、或物はその光を斜に受けて鮮かに透通り、或物は表面に手强く反射させて、激しい光體のやうに、とげのやうな光を放つた。そして、全體の葉が、緣側にゐては殆ど感じない微風に、鋭敏に動かされて、ぴらぴらとをののいてゐた。

不意に、かなり遠方に懸つてゐるらしい羊毛のやうな雲の前を、力一ぱい投付けた石のやうに、何處からか一羽

の小鳥が翔けて來た。張擴げた翼の上に、一面に日光を浴びて、兩翼の縁は笹縁のやうに閃き、その裏は黄金色の膜に透通りながら、よろめくやうに、その何處へ行くとも分らない空の旅行者は、樫の葉から屋根の端へ沒し去つた。

「すべての物の春だ。」

私は餘りに多量な光の洪水に疲れて、痛くなつた目を伏せて、暫くは自ら心の底から涌上つて來る喜悦のやうな情を感じてゐた。無心な幼兒は、乳房もない胸に柔かな片頰を押着けて、もう何時かすやすや眠に落ちてゐた。さも眠くてたまらないやうに眠りこけてゐるその小さな者の寢顔を見詰めながら、私は急に奇妙な感じに打たれたかうして抱かれてゐながら、又毎日私共の手で育てられてゐながら、一體このいとけない人間は、どんな事をその頭の中に思ひ感じてゐるだらう。どんな形式で、どんな幻想で、この外の世界を纏め、自分の内面の世界を築き上げてゐるだらう。

ぢつとその顔を視てゐる私の心に感じたか、そこともない微風に、鋭敏な樫の葉をそよがしてゐる同じ風に、輕くくすぐられたか、或は何か影のやうな夢でも軟かな腦髓の中に見たか、幼兒は突然さも嬉しさうに紅い唇を引きつらせて、につこり笑つた。誘ひ込まれるやうに、私も思はず微笑した。（「近代日本文藝讀本」所載の藤森成吉の文による）

二二　紅椿

山越えて來た古里の
家の籬にただ一つ
紅い椿が咲いてゐる

ああ紅椿紅椿
ありし昔をそのままに
夢ともならで咲く花よ

昨日吹いた西風は
遠い響となつて消え
今日麗かな海の町

ああ西風の止んだやう
わが悲しみも過去つて
一人しみじみ海を見る

古里の古里の
家の籬の紅椿
その葉を越して海を見る

（三木露風）

二三　碧色の花

色彩の中で何色を好むかと人に問はれて、私は卽答に迷うたことがある。

外套に欲しい冬の杉の色、十四五の少年を思はす落葉松の若緑、春雨を十分に吸うた紫がかつた土の黑、少女の頰にほふ櫻色、枇杷やバナナの暖かい黃、レモンや月見草の冷たい黃、銀色の鰭を閃かして飛魚の飛ぶ熱帶の海のサファイヤ(一)、或時はその面に紅葉を泛べ、或時は底深く日影の金絲を垂れる、山川の明るい淵の練つたやうな綠玉(ラルド)、盛りあがり搖りさげる岩蔭の波の下に咲く海アネモネ(二)の褪紅、緋天鵞絨を欺く緋薔薇や緋芥子の緋紅、北風吹きすさぶ霜枯の野の狐色、春の伶人の鶯が着る鶯茶、平和な家庭の鳥に屬する鳩羽鼠、高山の夕べにも、亦やんごとない僧の衣にも、水晶にも宿る紫、波の花にも、初秋の空の雲にも、山の雪、野の霜にも、大理石にも、樺の膚にも、極北の熊の衣にもなるさまざまの白、數へ立てると際限はない。

併しながら、必ずその一を擇ばねばならぬとなれば、私は種として碧色を、度として濃碧を擇ばうと思ふ。碧色、それは、三尺の春の野川の面に宿る有るか無きかの淺碧から、深山の溪に默する日蔭の淵の紺碧に至るまで、あらゆ

(一) Sapphire. 青色透明な寶石。

(二) Sea-anemone. 海岸の岩石に固着して生活する「いそぎんちやく」の別名。

る濃度の碧色、その碧色の中でも、殊に鮮かに煮返るやうな濃碧は、私を顫ひつかす程の力を有つて居る。

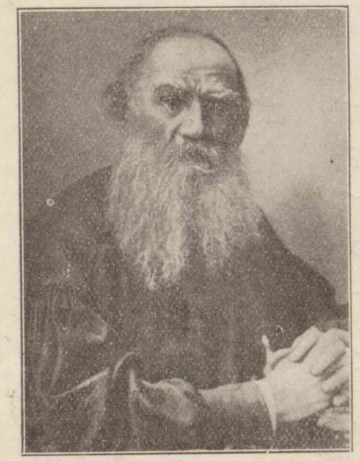
高山植物の花に就ては、私は呶呶する資格がない。園の花、野の花、普通の山の花の中で、碧色のものは可なりある。春龍膽や勿忘草の瑠璃草も可憐な花である。紫陽花や或種の菖蒲にも、不純ながら碧色を見れば見られる。秋には龍膽がある。或詩人は、嘗て私の村に遊びに來て、路に龍膽の花を摘み、つくづく見て、「青空の一片が落ちたのだなあ。」と趣ある言を吐いた。露の乾かぬ間の朝顔は、言ふまでもなく碧色を要素とする。夏の草花には矢車草がある。舶來種の、まだわが邦土には何處やら居馴染まぬ花だが、はら

(一)Corn-flower.

(二)Leo Nikolaievitch Tolstoy. (1828—1910) ロシアの大文豪。

(三)Yasnaya Polyana. トルストイの生誕地で、又その住居地。

りとした形も、深い空色も、涼しげな夏の花である。これは園内に見るよりも、コーンフラワーと名にもある通り、黄ばんだ小麥まじりに、畑に咲いたのが好い。或年の六月の末、朝早く、露西亞の中部にある一停車場から百姓の馬車に乘つてトルストイ翁をヤスナヤポリヤナに訪れた時、朝露に濡れそぼつた小麥畑を通ると、刈入れ近い麥まじりに、空色のこの花が此處にも其處にも咲いて居た。その時私は、睡眠不足の旅の疲と、トルストイ翁に會ひに行く興奮とで、冷靜さを失つてゐたが、その私



イトスルト

の目にも、花の空色だけは不思議に深い安息を與へた。

夏には更に千鳥草の花がある、千鳥草、又の名は飛燕草といふ。葉は人參の葉のそれに似て、花は千鳥か燕か、鳥の飛ぶやうな形狀をして居る。園養のものには、白桃色に紫の縞のもあるが、野生のそれは濃碧色に限られて居るやうだ。濃碧がうつろへば、菫色になり、紫色になる、千鳥草といへば、直ぐチタの高原が目に浮ぶ。それは露西亞からの歸途であつた。七月下旬莫斯科を立つて、十日目にチタを過ぎた。故國を去つて唯四個月、併し、ウラル山脈を東に越すと、急に汽車の進行がもどかしくなる。バイカル湖から一路上つて來た汽車は、チタから少し下りになつた。下り

(一) Tchita. 露領シベリアの外バイカル州の首都。
(二) Moscow. 露西亞の首府。
(三) Ural. アジア及びヨーロッパ兩大陸の間に横たはる山脈。
(四) L. Baikal. シベリアの中央にある大湖。

阪の速力は早く、好い氣持になつて窓から覗いて居ると、空にはあらぬ地の上の濃い碧色が、さつと目に映つた。野生千鳥草の花である。私は頭を突きだして見廻した。鐵路の左右、人氣もない荒寥を極めた山坡に、見る目も染まるばかりの濃碧のその花が、今を盛りに咲誇つたり、やや老いて紫がかつたり、まだ蕾んでゐたり、何千何萬數へ切れないその花が、汽車を迎へては送り、送つては迎へした。窓に凭れた私は、氣も遠くなるまでに、その色に醉うてゐたのであつた。

併しながら、碧色の草花の中で、私は露草のそれにまた美しい碧色を知らない。露草、又の名を螢草、つき草、鴨跖

草など言つて、草の姿は見るに足らず、ただ二瓣より成る花は、全き花といふよりも、いたづら子に毟られた殘餘の花の斷片か、小さな小さな碧色の蝶が只假初に草にとまつたかとも思はれる。壽命も短くて、本當に露の間である。しかも、金粉を浮べた花蘂の黃に映發して、惜氣もなく咲出でた花の透きとほるやうな鮮かな純碧の色は、これに比べるに足る物は一つもないだらうと思ふまでに美しい。露草を花と思ふのは誤た。花ではない。あれは色に出た露の精である。姿脆く、命短く、色美しいその面影は、人の地に見る刹那の天の消息でなければならぬ。里のはづれの耳無地藏の祠の下などに、さまざまの他の無名草、醜草ま

じりに、朝露を浴びて、目が醒めるやうに咲いた露草の花を見ると、龍膽を讃へた詩人の言をここにも假りて、

青空の灝氣滴り落ちて露となり、露色に出て、ここに青空を地に甦らせる露草よ。地に咲く天の花よ。

と讃へずには居られぬ。ガリラヤ人よ、何ぞ天を仰いで立つや。吾等はとかく青空ばかり眺めて、足許に咲く露草をついに知らぬ間に踏みにじる。碧色の草花として、露草は粹である。（德富健次郎の「みみずのたはこと」による）

*Galilean. 古のパレスチナ州の住民。

二四　わが國の家庭

小さい兄や姉が、弟や妹を背負つて道端に遊んで居る

のは、わが國では、何處へ行つても見受けることであるが、西洋では決して見られない。それを始めて見た或外國人が、「何といふ可愛らしい樣子であらう。ここに日本の美しい國風が見える。」と言つて感心したさうである。素直に親の言付を守るのは、日本の子供の美德である。兄や姉が小さい弟や妹を可愛がつて世話をするのも、日本の子供の美德の一つである。世話になつた弟や妹が兄や姉を大切にするのも、日本の家庭の特色の一つである。この西洋人は、委しくはわが國の家庭の內部を知らなかつたのであらうが、道端の子供を見ただけでも、わが國の家庭の美德、「父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ」の一端を認め得たのである。

父母の子を愛する情は、東西共に變りはないが、わが國の家庭では、殊に子供を大切にする。家の貧富貴賤によつて、生活上にはそれぞれの差別があつても、一體の風習は、子供を大切にする。子供は父母の寶といふのみでなく、家の寶として尊重される。子が生れた時の父母の心は、家の後繼が出來たのを喜び、家の益〻繁昌して行くのを祝ふのである。親族も朋友も皆同じ心で祝賀するのである。七夜までの中に名を付ける。「行末は、立派な人になつて、御國のためにもなれ。」と、祖先の名に因んだり、めでたい語などを選んだりして付ける。三十二三日目に、產土神にお宮參をして、誕生した事をお知らせする。三つ五つ七つと段段成

長すれば、七五三の祝といつて、その年年の十一月にお宮に參詣する風習もある。男の子の袴着の祝、女の子の帶の祝、父母はひたすらその子の成長を樂しむのである。

三月三日の雛祭は女の子の節供、五月五日の端午は男の子の節供、一家中の歡喜は小さい子供等の爲に傾けられる。美しい雛人形、勇しい鯉幟、かういふ樂しい日は、年年に繰返されるのである。盆やお歳暮の贈物にも、父母は子供等を喜ばせようと苦心し、親類知友からも、御子樣へと心をこめた品物を贈る。わが國の都市ほど、おもちや屋の多い處はないといふのも、小さい國民を可愛がる國風の盛んなことを證明する。

わが國の家庭には、父も母も、お祖父さんもお祖母さんも居る。そして、子供は、父母の慈しみの外に、祖父や祖母の愛をも受ける。祖父や祖母は、孫を愛撫して老を慰める。家の中には神棚があり、佛壇があつて、先祖の位牌が祀つてある。わが國の家は、先祖からの家で、先祖と一緒に住んで居つて、段段と子孫に傳はつて行くのである。家には家の系圖もある、先祖から傳はつた品物もある。新しい家や、別家した家には、さういふ物の無いのもあるが、本家に溯り、源を質せば、皆それがある。家には家の紋もある。

父母はわが家の神わが神とこころ盡していつけ

人の子

と本居宣長は歌つた。父母は子等を家の寶と思ひ、子等は父母を家の神とあがめるのが、わが國古來の道である。親の親の世から傳へて來た道である。親しい、懷しい、親愛の情に、貴い、有り難い、敬愛の情が涌いて、父母に對しては、神に對するやうな、つつましやかな心持になるのである。それ故、言語や動作にもそれが表れて來る。外國の家庭では、親子、夫婦、兄弟、姉妹の間の言葉遣は、すべて對等であるが、「家の神」と仕へ奉る父母に對しての言語は、もとより別でなければならぬ。先祖と同居して居るわが國の家庭では、目上に對する言語と、目下に對する言語とに、明かな差別がある。親代りに世話をし、いたはる兄姉に對しても、敬語

*江戸時代の大學者。（一七三〇―一八〇一）

を遣はなければならぬ。兄姉は飽くまで幼少な弟妹をあはれみ、弟妹は何處までも兄姉を目上の人とあがめ、兄弟仲好くして父母に仕へ、父母の心を慰めて、ここに美しい樂しい家庭が成立つのである。「父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和」する家庭が存立するのである。

西洋人は、「日本は子供の樂園である。」と言つて居る。又「日本は子供を可愛がる國である。」とも述べて居る。我等がこの國に生れたのは、我等の幸である。（芳賀矢一の文による）

二五　北京雜觀

北京の街を歩いてゐる時には、我我は全く時間の觀念

から脱却して了ふ。それは、七時半の夕食の約束に間に合ふ合はないの程度ではない。我我は二十世紀の現代から全く解放されて了ふ。六千年の文化の消長のうちに生息しながら、悠久な人文發達の跡を目のあたり見て、なるほどこれが人生であるかと目がさめる。十年、百年は問題ではない。況や一年二年の小なるをや。

支那人の落着いた、ゆつたりした心持が、やがてこの街に居る外國人の性急を征服して了ふ。そして、北京の街路、——それは何度同じ處を歩いても見飽かない眺である。四方に聳える樓門の高きを言はずとも、遙かに見える宮殿の甍の黄と緑とであることを説かずとも、狹い路地の

内にも、賑かな商業街の光景にも、掬するに餘ある人間味が溢れてゐる。

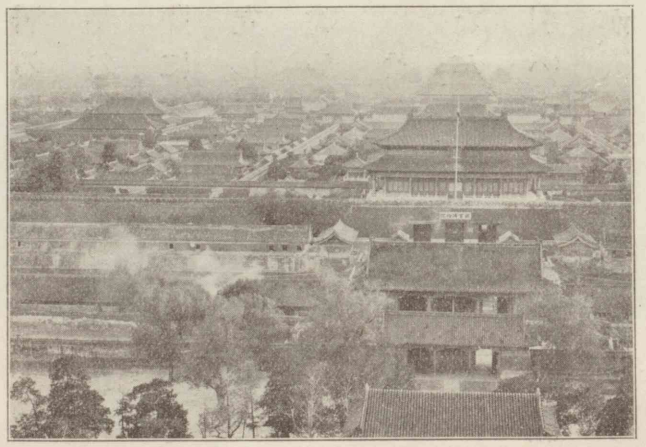
第一に、我我を引きつけるものは北京の色である。支那の家屋は屋根瓦も塀も皆鼠色である。それは、生氣も變化もない鼠色の濃淡である。併し、その凡ての鼠色の自然色の内に、門の扉や柱は大膽な朱に塗つて、その輪郭を黑で色どり、これに紺と青とをあしらつて、さて、その右側に、大きな金の門札に「張寓」などと黑で筆太に記してゐるのが我我を驚かす。ちやうど、倫敦の街を歩いてゐると、あの煤ぼけた煉瓦造の家家の窓に、思ひ切つた朱のカーテンの懸つて居るのを見る時のやうな感じである。そして、支那

の門のすぐ後にある、惡魔よけの扉が目につく。支那の惡魔は目がないので、眞直に門から飛込んで來て、この扉にぶつかつて死ぬのださうだ。その扉を開いて、目のあいた支那の從者が、右手に高く來客の名刺を捧げながら、案内してゆく。さうして、門の兩側には、よく石の獅子などが置いてある。

併し、人を驚かす光景は、生きた人間と動物とである。殊に日本のやうに、人間と動物との間に親しみのない國から行く者は、支那の大都會の中を、愉快げに人間と一緒に歩いて來る色色の動物の姿態に一驚を喫する。

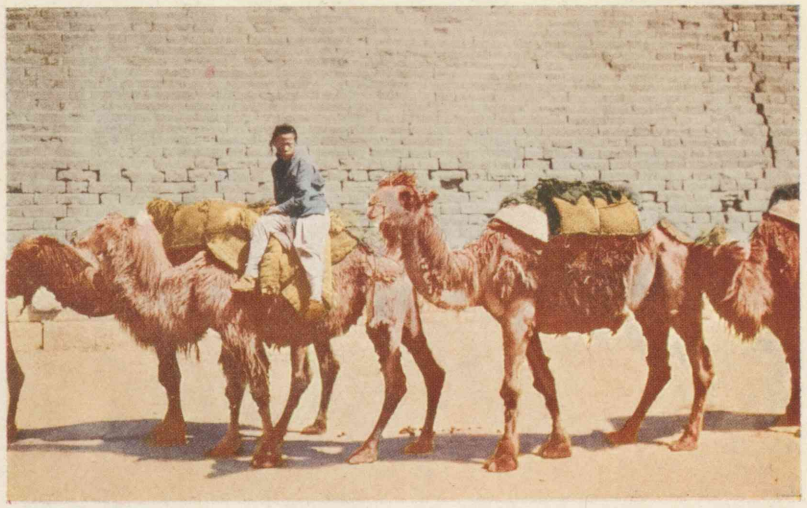
初めて駱駝を北京城内で見る人は、必ず一度は足をと

どめて、その悠然たる後姿を見送るであらう。あの駱駝が首をすつくと高く擧げて、少し顎をしやくり氣味に後へ引いて、悠悠と足を整へて歩いて來るさまは、何としても動物の中の貴族である。そして、如何なる雜沓の巷でも、彼だけは一頭地を抜いたままで、冷やかにながし眼に地上の光景を見下ろして居る。その無關心な超然とした態度が、面憎いほど落着いたものである。人間の焦燥や、



紫禁城

北京朝陽門



北京城内の駱駝

犬や豚の喧騒を、彼はにがにがしいことのやうに考へて居るに違ない。そのふさふさと垂れた褐色の毛で、安全に冬の寒さから救はれて居る彼は、身を切るやうな朔風の間に立つても、あわてもわるびれもせず、昂々焉として聳立してゐる。動物の中で一番自尊心の強いものは、或は駱駝かも知れない。

その傍を驢馬に乘つた男が通る。幾十羽かの鶩を追ひながら農夫が行く。豚が路地から一散に走り出す。驢馬が引いて通る車の内に、滿洲婦人の髪飾が見える。物賣の男が、天も破れよと呶鳴り立てる。一人の客を見かけて、二十人の車夫が轅棒をつきつける。その混雑と不統一とを尻

目にかけて、黑帽黃線の巡警が、のつそり閑と町の眞中に突立つて居る。（鶴見祐輔の「思想、山水、人物」による）

二六　機械と文明

我我は、往往畜類を輕蔑して四つ足といふ。なるほど、我我が二本の足で直立が出來、これがため、手を自由に用ひ得るに到つた事は、我我人類の大いなる誇である。

この自由な手を持つやうになつて、我我は始めて、經濟的發達の根本動力である諸道具を造り出すやうになつたのである。手があればこそ、始めて今日の人間になつたとも言へる。そこで、我我は手で人を代表させ、相手、手代、騎

手、名手、選手などといふ。

かやうに、手は人間にとつて、至つて大切なものであるが、その手の更に延長したものが、畢竟道具である。さうして、その道具の更に延長したものが今日の機械である。機械は、發動機と傳動機と道具との三部分から出來て居るもので、卽ち道具に加へて、更にその道具を動かす爲の仕組を以てしたのである。そこで、道具は單に人力の補助をなすに過ぎないが、機械はこれと異なり、謂はば、自動的の道具である。晝夜の別なく、獨りカチカチと動く時計などは、最も小規模な機械の一つである。

既に機械は自動的である。さればこそ、一度これを貨物

の生産に應用すると、我我は別に勞役に服しなくても、容易に物資の豐富な供給を得るのである。今日西洋諸國の經濟が驚くべき發達をした根本原因は、全くこの機械の應用が各方面に普及した爲である。彼等の富は、斷じて勤儉貯蓄の結果のみではない。刻苦勵精したのは、必ずしも人ではなくて、寧ろ機械であるとも考へよう。

試みに、これを新聞紙の印刷に就て考へて見るに、若しこれを木版に彫つて手刷にしたら、勞力も非常で、費用も亦夥しいものであらう。機械の力に依ればこそ、何十萬部を瞬く間に刷上げ、一日十頁、一個月三百頁といふ大部のものを、わづか一圓位の代價で提供する事が出來るので

ある。米國で調査した所に依ると、三萬六千頁の新聞紙の印刷及び折込に要する勞働時間は、全く機械を使用すると、僅に一時間と八分を要するに過ぎないといふが、これは二十年程前の事である。種種改良の行はれた今日では、その所用時間は更に短縮されてゐるであらう。

又、米國の農業者が若し機械を用ひず、五十年前の舊い方法で現在の收穫を得ようとするならば、これが爲に生ずる增加生産費は、玉蜀黍にあつては十億四千六百萬圓、小麥にあつては一億四千八百萬圓、燕麥にあつては一億六千萬圓の巨額に達する計算であるといふ。

巴里のエッフェル(一)塔の高さは、無慮九百八十呎、塔上に

(一) Eiffel Tower. フランス人エッフェルの建設した高塔。

(二) Pyramid. 埃及カイロ附近にある古代國王の墳墓。金字塔。

エッフェル塔

は、喫茶店もあり、無線電信の設備まであつて、海の向ふの加奈陀に打電することが出來るといふ。併し、單に高いといふだけなら、遠い昔の埃及人も、高さ四百八十呎のピラミッド(二)を造つて居る。かの白蟻でさへ、亞弗利加や濠洲に居るものは、約二丈に達する塔を造る、人間から見ては、二丈

は驚くに足らないが、白蟻からいへば、彼等の身長の約千倍に及ぶ高さである。かうして、假令簡單な道具だけでも、否道具は全く無くても、必ずしも高い塔が造られぬといふ譯は無い。ただ問題は、時間と勞力とに比較にならない差異があるといふことである。

埃及最大のピラミッドを造るためには、約十萬の人間が、殆ど三十年に亘つて使役せられたのであるが、その二倍以上の高さを有するエッフェル塔は、博覽會の餘興として、僅か三年間に落成したものである。昔は、馬上の急使でも、津輕から薩摩まで二十二三日乃至三十日を要したが、今は、坐ながらエッフェル塔上から、海上遙かに何千哩

を距てた遠い加奈陀に通信が出來る。畢竟、機械の特長は、勞せずして功を收める點に在る。

思ふに、道具を發明する能力の有無で、人間と動物との生活に、根本の隔たりが生じたやうに、機械を發明してこれを利用し得る文明人と、これの出來ない未開人との間にも、同じやうな隔たりが生じて居るのである。若し人間を以て道具を製造する動物と定義することが出來るなら、所謂文明人とは機械を使用する人間と定義することが出來る。そして、蟻や蜂が如何に勤儉貯蓄しても、到底道具を有する人間に及ばぬやうに、未開人も亦如何に勤儉貯蓄しても、到底機械を使用してゐる文明人に及ぶこと

は出來ないのである。（河上肇の文による）

二七　讀書

常に良き著述に親しむものは、只一人居れども、寂しきことを覺えず、師を求めざれども、日に月に學ぶ所あり。失意もこれに慰み、不平憂悶もこれに忘る。「書は少年の滋味にして、老年の娯樂なり。順境には心の飾ともなり、逆境には庇護と慰諭とを與ふ。外に出でたる時も邪魔とならず、家に在れば心を樂しましむ。夜の伴、旅の伴、僻地の伴。」と、羅馬の名士シ*セロの言ひたるも同じ心なり。されど、かくの如きは、人の讀書より受くる最大の利益にはあらず。

*Cicero.（B.C.106—43）羅馬の政事家で文學者。殊に雄辯家として名高い。

諺に「百聞一見に如かず。」といへるは、何事も、その身親しく經驗するに如かずといふ意味なれど、人の壽命に限あれば、七十、八十まで生きたりとも、目に見、耳に聞くことは幾何もあるべからず。わが日本國内の山水、風俗だけにても、一生には觀察し盡さるまじきを思ひ、天地の大いなるを思ひ、時の窮まりなきを思へば、人間一身の經驗の狹く淺く小さく、且つ少なかるべきは言ふにも及ばぬ事なり。

されば、こそ、今も、昔も、苟も廣く事物の眞を知らんと欲する人人は、一方には見聞を勵み、經驗を努むると共に、他方には内外古今の名著を得て、これに親しまんことを願ふなれ。後れて生れたる者にして、良書の助を借ることな

く、只、その腦力のみを恃まば、自然界の事も、人間界の事も、僅にその一斑を窺ふに過ぎざるべく、その一斑さへも正しく明かには見得ざるべし。要するに、書は知識の寶庫にして、かねて智を研ぐ砥石なり。されど、讀書の用は猶これに盡きたるにあらず。

伊太利の詩人ペトラルカ*は曰く「予に良友あり。彼等は皆名士大家にして、何れも偉業を成したる者なり。余若しその助を藉らんとすれば、彼等は喜んでわが請を容る。」と。これ、良書が常にその讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、奬勵する力あるを言へるなり。

人は良書に親しみて、まづわが卑小なるを知るなり。次には、或は他の識見の大いなるに驚き、或は品性の高きに感じ「嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく、偉なること、かくの如きものあるか。」と歎ずるなり。若し、かりそめにも、その偉大なるもの、優美なるもの、清淨なるもの、崇高なるものに私淑し、これに倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに到りなば、書の用極まれるに近しといふべし。

（坪内逍遙の文による）

*Petrarch.（1304—1374）伊太利の詩人で又哲學者としても有名である。

新女子國文卷三終

附錄　作者小傳

西條八十　文學者。明治二十五年東東市に生れた。早稲田大學英文科卒業後、東京帝國大學國文科選科に學んだ。今、早稲田大學文學部講師である。又、詩人として童謠作家として有名である。「砂金」「靜かなる朝」「西條八十童謠全集」「蠟人形」「赤き獵衣」等の作、並に「新しい詩の味ひ方」「現代童謠講話」等の著書がある。

大類　伸　文學博士。東京の人。明治三十九年東京帝國大學史學科出身。現に東北帝國大學教授である。城郭の研究に關する一權威者と稱される。「歷史と自然と人」「城郭の研究」「史跡めぐり」などの著がある。

高濱虛子　俳人。名は淸。明治七年松山市に生れた。第三高等學校を中途退學して、正岡子規の門に入り、俳壇に重きをなすに到つた。又俳句より寫生文に進み、又小說に筆を執り、「鷄頭」「凡人」「俳諧師」「續俳諧師」「朝鮮」等の小說、その他俳句に關する著書が多くある。

夏目漱石　名は金之助。慶應三年江戸に生れた。二松學舍に入つて漢學を修め、東京帝國大學に入つて英文學を專修し、卒業後、高等師範學校、松山中學校、第五高等學校等に教鞭を執り、後英國に留學して、歸るや、第一高等學校教授、東京帝國大學講師となつて、專ら英文學を講じてゐたが、後、職を辭して朝日新聞社に入り、專ら筆硯に從事した。英文學に造詣深いのみならず、漢學の素養も豐かで漢詩を能くし、且つ俳句に於ても亦一家を成した。明治文壇一方の重鎭であつた。又書に巧に畫を能くした。大正五年十二月歿。年五十。「吾輩は猫である」「鶉籠」「虞美人草」「文學論」「三四郎」「それから」「門」「彼岸過迄」「明暗」等いづれも有名な著作である。その創作、感想、評論、消息、日記等、收めて「漱石全集」にある。

森　鷗外　醫學博士、文學博士。名は林太郎。萬延元年島根縣津和野町に生れた。明治十四年東京帝國大學醫學部卒業。十七年獨逸へ留學し二十一年歸朝。職を陸軍に奉じ日露戰役には第二軍軍醫部長として出征し、後、陸軍省醫務局長、陸軍軍醫總監に進み、官を辭して後も、東京帝室博物館長、帝國美術院長等に任ぜられた。獨逸文學に精通し、明治の文學界に外國文學を輸入した効は甚大なものである。大正十一年歿。年六十一。その翻譯は極めて多く、又自ら詩に小說に劇に評論に史傳に筆を揮つた。その全集は今現に刊行されつつある。

相馬御風　文學者。本名は昌治。明治十六年新潟縣西頸城郡糸魚川町に生れた。早稲田大學英文科出身。永らく早稲田大學講師を勤めてゐたが、只今では鄕里に歸住してゐる。「大愚良寛」「砂上漫筆」「雜草苑」「田園春秋」「野を歩

む者」「御風歌集」等の著があり、その他に飜譯もある。

與謝野晶子　歌人。歌人與謝野寛夫人。明治十一年大阪府堺市に生れた。堺市立高等女學校出身。明治三十三年以來新詩社同人として歌壇に重んぜられ、女流歌人として、明治大正に亙つて最も注目すべき人である。その歌集、詩集、評論、感想、隨筆、小說、童謠など數十種の著書がある。現に文化學院學監である。

西條八十　既出。

荻原井泉水　俳人。本名は藤吉。明治十七年東京市に生れた。東京帝國大學言語學科卒業。「井泉句集」「層雲句集」「井泉俳話」「旅人芭蕉」等の著作がある。

谷崎潤一郎　文學者。明治十九年東京市に生れた。東京帝國大學國文科に學んだが、卒業を待たないで小說家として立ち、又劇作に筆を揮ひ、極めて特色ある作家として認められて居る。「刺青」「人魚の嘆き」「異端者の悲しみ」「金と銀」「AとBとの話」「愛すればこそ」「アベマリア」「神と人との間」「藝術一家言」その他多くの小說、劇作などがある。

五十嵐力　文學博士。明治七年山形縣米澤市に生れた。二十七年早稻田大學の前身東京專門學校文學科卒業。現に早稻田大學文學部長である。「文章講話」「新文章講話」「作文三十三講」「新國文學史」「半農生活」「平家物語の新研究」「甲鳥園隨筆」「國歌の胎生及發達」「趣味の傳說」「我が書翰」等の著がある。

薄田泣菫　文學者。本名は淳介。明治十年岡山縣淺口郡連島町に生れた。若くして上京し、詩作に專念して遂に一家をなすに到つた。「暮笛集」「ゆく春」「白玉姫」「二十五絃」「白羊宮」「泣菫詩集」などの詩集がある。隨筆家としても有名で、「茶話全集」「泣菫文集」「太陽は草の香がする」等の著がある。

吉田絃二郎　文學者。本名は源次郎。明治十年佐賀縣神埼郡西鄕村に生れた。早稻田大學英文科卒業。「生の悲劇」「芭蕉」「ダビデと子たち」「島の秋」「大地の涯」「光落日」「人間苦」「無限」「白路」等の小說、「生命の微光」「小鳥の來る日」「草光る」等の感想集の著がある。

宮崎丈二　詩人。明治三十一年千葉縣銚子町に生れた。時時詩作を發表して居るが、又草土社の社友で、畫にも巧である。

北原白秋　詩人。本名は隆吉。明治十八年福岡縣柳河町に生れた。しばらく早稻田大學英文科に學んでゐたことがある。詩人として童謠作家として、又歌人としてその名高く、「白秋詩集」「白秋童謠集」「白秋小唄集」「水墨集」「北原白秋選集」「桐の花」の集があり、又感想小品等を集めた「風景は動く」「季節の窓」「洗心雜話」などがある。

生方敏郎　文學者。明治十五年群馬縣沼田町に生れた。明治學院を經て早稻田大學英文科卒業。その文は皮肉諷刺を以て有名である。「虐げられた笑」「女性は支配する」「人のアラ世間のアラ」「一圓札と猫」「微笑哄笑苦笑」その他の文集がある。

野上彌生子　文學者。明治十九年大分縣臼杵町に生る。法政大學教授野上豐一郎夫人。「傳說の時代」「新しき生命」「小說六つ」「海神丸」「人間創造」等の著がある。

吉村冬彦　理學博士。本名は寺田寅彦。明治十年高知市に生れた。東京帝國大學理學部出身、現に同大學理學部教授である。夙に正岡子規、夏目漱石等と親交あり、文學的趣味の豐かな文章を時時發表してゐた。「藪柑子集」「冬彦集」は共にその小品を集めたものである。

那珂通高　博識家。陸中の人。初め江幡五郎と稱し、梧樓と號した。安積艮齋、森田節齋に從學した。後、藩の督學となつた。維新の際、王師に抗したので幽囚された事もある。後ゆるされて、文部省に出仕し、榊原芳野と「古事類苑」を修めた。平生甚だ酒が好きで、遂に明治十二年五月一日、友人と對ひ合つて、大いに飲みながら永眠した。年五十二。

矢田挿雲　文學者。明治十五年金澤市に生れた。早稻田大學卒業。後、新聞記者として今日に及び、現に報知新聞編輯局相談役である。嘗て正岡子規に師事して俳句を學び俳人としても一家をなして居る。「江戸から東京へ」「清水次郎長」「澤村田之助」等の著作あり、月刊「俳句と添削」主幹「大衆文藝」同人。

菊池寛　文學者。明治二十二年高松市に生れた。京都帝國大學英文科卒業。暫く時事新報の記者をしてゐたが、後辭して只管文筆を事とするに到つた。「冷眼」「極樂」「心の王國」「道理」等の短篇集、「眞珠夫人」「火華」「新珠」「陸の人魚」等の長篇小說、「藤十郎の戀」「茅の屋根」等の脚本集、及び隨筆「文藝往來」「我が文藝陣」等がある。

藤森成吉　文學者。明治二十五年長野縣上諏訪町に生れた。一高を經て、東京帝國大學獨文科卒業。嘗て岡山第六高等學校講師であつたが、今は專ら文筆に從事してゐる。「新しき地」「若き日の惱み」「研究室で」「寂しき群」「煉獄」「その夜の追懷」「磔茂左衛門」等の著作がある。

三木露風　詩人。本名は操。明治二十二年、兵庫縣揖保郡龍野町に生れた。早稻田大學や慶應義塾大學に學んだことがある。嘗て北海道のトラピスト修道院に教鞭を執つてゐた。詩歌集「夏姫」、詩集「廢園」「寂しき曙」「白き手の獵人」「露風集」「幻の田園」「良心」「蘆間の幻影」「象徵詩集」「青き樹かげ」童謠集「眞珠島」、文集「露風詩話」「歌詩の道」「修道院雜筆」等の著がある。

徳富健次郎　文學者。明治元年熊本縣葦北郡水俣町に生れた。京都の同志社に學んでゐたことがある。嘗て兄蘇峯の經營する民友社に入り、國民新聞に關係してゐたが、後全く世間と絶ち、田園生活を營みつつ、文筆に親しんでゐる。「不如歸」「自然と人生」「思出の記」「みみずのたはこと」「死の蔭に」などはその多くの著書中殊に有名である。

芳賀矢一　文學博士。慶應三年福井市に生れた。東京帝國大學文科出身。東京高等師範學校教授、東京帝國大學教授等に歴任し、國文學者として一世に重んぜられた。昭和二年二月歿、年六十一。重なる著書としては「國文學史十講」「國民性十論」「月雪花」「國文學歴代選」等である。

鶴見祐輔　法學士。明治十八年東京に生れた。東京帝國大學法學部政治科卒業。直に鐵道省に入り、書記、同副參事、書記官、運輸局總務課長などに歴任した。屢〻海外に出張研究を命ぜられて、交通事務の事に精通してゐる。大正十二年官を辭し、後、談論文筆を以て有名である。「三都物語」「思想山水人物」「鶴見祐輔大演説集」等の著がある。

河上肇　法學博士。明治十二年山口縣岩國町に生れた。東京帝國大學法學部出身。東京帝國大學農科大學實科、學習院等の講師から、讀賣新聞記者、慶應義塾教授を經て、四十二年京都帝國大學教授に任ぜられた。經濟學者として知られてゐる。その著書には「祖國を顧みて」「社會問題管見」「唯物史觀研究」「近代經濟思想論」「資本主義經濟學の史的發展」等がある。

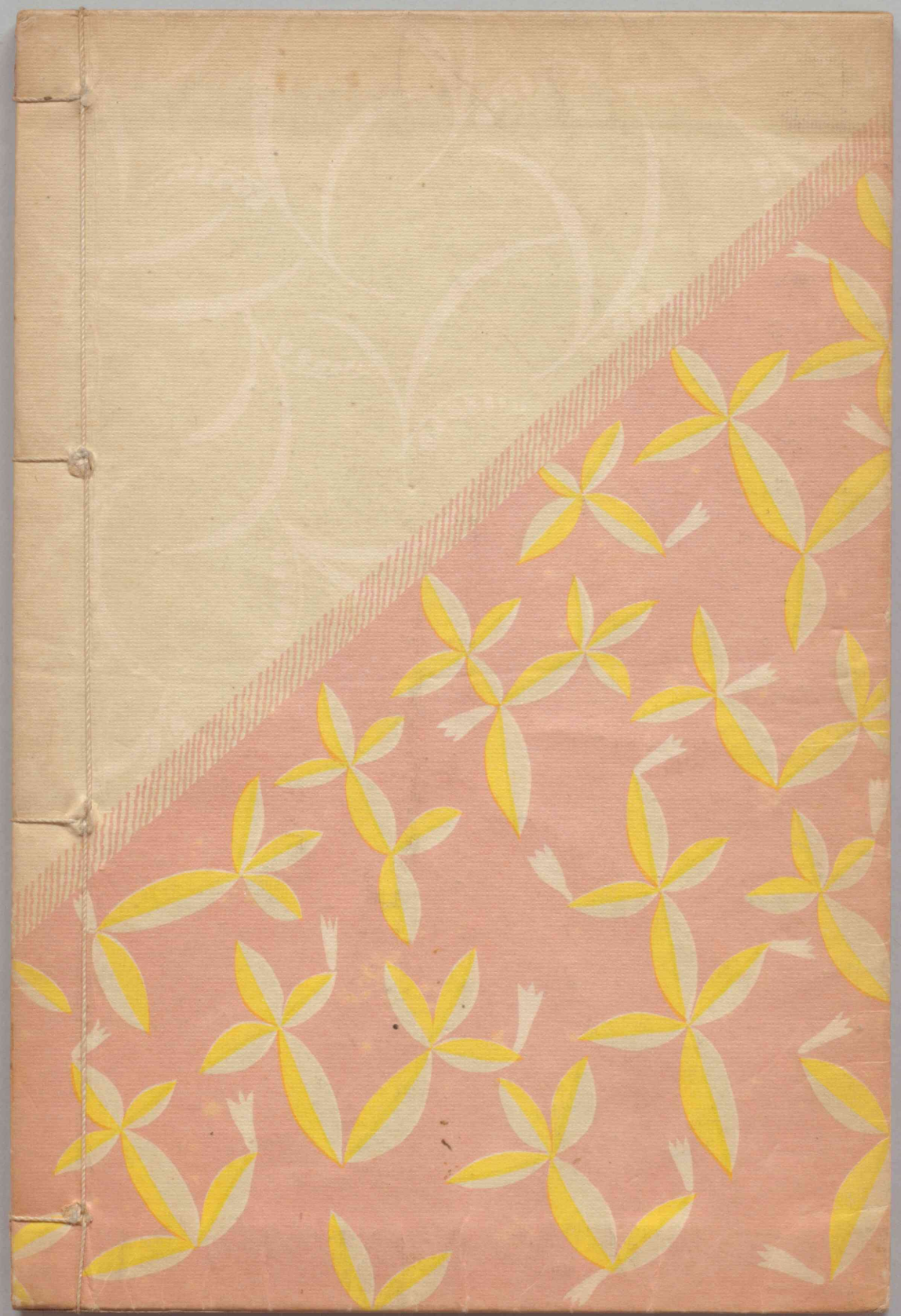
坪内逍遙　文學博士。名は雄藏。安政六(一八五九)年美濃國茂川郡太田町尾張代官所に生れた。明治十六年帝國大學文學科を卒業し、爾來力を東京專門學校、早稲田大學に盡し、現に同大學の名譽教授である。英文學に造詣深く、明治文學の開拓者であり、演劇改革の先覺者である。その著「小説神髓」「當世書生氣質」「桐一葉」「牧の方」「新樂劇論」「新曲浦島」等は、皆それぞれ斯界に一紀元を劃したものである。明治四十五年明治文學の功勞者として、文部省から賞牌及び賞金四千圓を贈られたが、博士はその賞金の一半を二葉亭、美妙齋等の遺族に贈り、一半を文藝協會に投じた。著書は前記の外、小説「妹と背鏡」「細君」、戯曲に「沓手鳥孤城落月」「名殘の星月夜」「義時の最後」「法難」「役の行者」、樂劇「かぐや姫」「お夏狂亂」「寒山拾得」、評論に「春の舍漫筆」「小羊漫言」「文學その折々」「梨園の落葉」「作と評論」「劇壇最近の十年」「それからそれ」「藝術と家庭と社會」「幼年時に觀た歌舞伎の追憶」、飜譯「沙翁傑作集」二十一卷、その他「家庭用兒童劇」「學校用小脚本」等がある。

大正十五年十月二十五日印刷
大正十五年十月二十八日發行
昭和　一年二月二十六日訂正印刷
昭和　二年三月　一日訂正發行

新女子國文（全十册）

定價
卷一、二、各四拾四錢　卷三、四、各四拾貳錢　卷五、六、各四拾錢　卷七、八、各參拾八錢　卷九、十、各參拾五錢

昭和三年臨時定價
卷一、二、各七拾參錢　卷三、四、各七拾錢　卷五、六、各六拾六錢　卷七、八、各六拾參錢　卷九、十、各五拾八錢

編纂者　下田次郎
編纂者　尾上八郎
發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　株式會社明治書院　取締役社長　鈴木友三郎
印刷者　東京市神田區三崎町三丁目一番地　細谷祐三
發行所　東京市神田區錦町一丁目　株式會社明治書院
振替貯金口座東京四九九一番　電話神田(25)二六九五・二六九六

不許複製